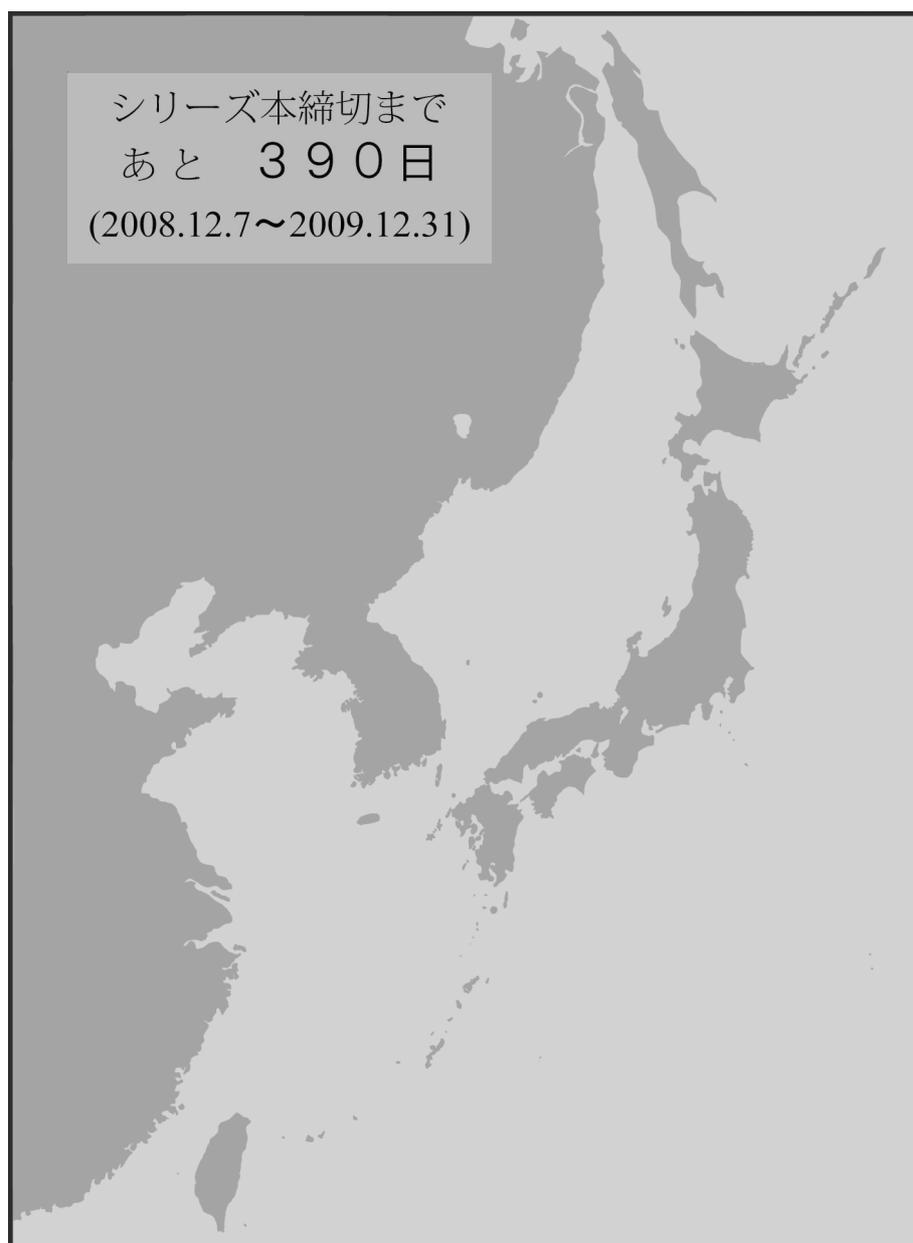


総合地球環境学研究所 プロジェクト D-02

「日本列島における人間－自然相互関係の
歴史的・文化的検討」

全体会議 発表要旨集

《第2分冊:12月7日》



2008年12月6日～7日

総合地球環境学研究所 講演室

◆列島プロ 今後のスケジュール (2008年12月6日－2011年3月30日)

- ・ 2008年度
 - ◇ データ収集と解析
- ・ 2009年度
 - ◇ 5月. 列島プロ WS「日本列島の生物文化多様性とその保全」を開催
列島プロ コアメンバ会議
 - ◇ 2009年9月 データ収集と解析の終了、シリーズ本執筆へ
列島プロ WS またはシンポジウムを予定
 - ◇ 2009年11月28日(土)29日(日). 全体集会【候補日】
 - ◇ 2009年12月末. 原稿締め切り. その後、著者ごとで相互査読.
- ・ 2010年度
 - ◇ 2010年4月までに. 査読と改訂の終了.
 - ◇ 2010年4月. 列島プロ コアメンバ会議
 - ◇ 2010年5月. 地球研開催の国際シンポ ※COP10のプレイベント.
「アジアの生物文化多様性：過去・現在・未来」
 - ◇ 2010年4～7月. 出版社とやりとりしつつ編集作業.
 - ◇ 2010年8・9月くらい. 秋(というよりも晩夏)の出版
 - ◇ 2010年10月18日(月)～29日(金).
COP10 生物多様性条約第10回締約国会議(名古屋)
 - ◇ 2010年11月末か12月初旬. 全体集会

◆各班のイベント予定・出版計画

- ・ サハリン・沿海州班
2009年度 忠類ナウマン象発掘調査報告書 刊行予定
- ・ 東北班 2009年度 地元の人を交えたシンポジウム (岩手県)
- ・ 中部班 2009年3月7日(土)～8日(日) 現地報告会 (長野県栄村)
- ・ 近畿班 2009年度 民家報告書 刊行予定
- ・ 奄美・沖縄班 2009年2月13日(金)～14日(土) 地球研 地域セミナー
(沖縄県名護市・国頭村)
「やんばるに生きる－自然・文化・景観のゆたかさを育む地域と観光」
聞き書きブックレット出版
- ・ 栽培植物班 2009年3月 シンポジウムか講演会

目次

《第1分冊》

ごあいさつ	3
研究プロジェクト計画書	5
古人骨班 同位体分析からみた日本列島の食生態	9
古生態班 最終氷期最盛期における各地域の植生と主要分類群の分布	19
植物地理班 遺伝子型分布地図からみた日本列島における植物の分布変遷	24
方言班 現代方言からみた植物利用の地域多様性	27
栽培植物班 植物の栽培化と野生化	
一東アジア原産の栽培植物の多様性の分析から一	32
マルハナバチ班 中部山岳域におけるマルハナバチの分布と草原の歴史	37
その他 縄文・近世・現代における中大型哺乳類の分布変遷	44
ポスター発表 要旨	46

《第2分冊》

第1巻 『日本列島の環境史』の概要	63
第2巻 『野と原の環境史』の概要(活動報告:サハリン・沿海州班,九州班)	68
第3巻 『林と里の環境史』の概要(活動報告:近畿班)	82
第4巻 『海・森・島の環境史』の概要(活動報告:北海道班,奄美・沖縄班)	92
第5巻 『山と森の環境史』の概要(活動報告:東北班,中部班)	104
第6巻 『人と自然の環境史』の概要	116
全体会議 参加者名簿	119

第 1 卷 『日本列島の環境史』

編集責任: 高原 光 (京都府立大学), 村上 哲明 (首都大学東京)

巻の趣旨: 日本列島は歴史時代以降、一貫して人口稠密地域であり、大部分の自然が人間活動の影響を強く受けている。また日本列島の生物相は、気候変動に伴って大陸から移入してきた生物を基層にしているが、それに人間がさまざまな時代に持ち込んだ生物が加わって形成されている。人々の生活も、さまざまな生物資源の利用の上に成立してきた。この巻では、古生態学的手法、分子系統地理学的手法、安定同位体をもちいた生態人類学的手法、動物・植物考古学的手法、社会言語学的手法によって、最終氷期以降における日本列島の生物相の変遷と人間の資源利用の歴史を論じる。

目次:	(タイトル)	(執筆者)
第 1 章	「日本列島の生物文化多様性と『賢明な利用』」	湯本貴和・矢原徹一
第 2 章	「日本列島に住む人々はどこから来たか」	片山一道
第 3 章	「日本列島における最終間氷期以降の植生史」	高原 光ほか
第 4 章	「DNA からみた植物の分布変遷」	村上哲明・瀬尾明弘ほか
第 5 章	「植物化石と DNA からみた最終氷期最盛期のレフュジア」	津村義彦・百原 新
コラム 1	「日本養蜂史にみる共生と攪乱」	清水 勇
コラム 2	「日本の蛇紋岩を例とした特殊土壌地域における固有植物」	川瀬大樹
第 6 章	「古人骨からみた日本列島の食生態の歴史的変遷(仮)」	米田 穰・陀安一郎・日下宗一郎・石丸恵利子・片山一道・湯本貴和
第 7 章	「木製品からみた森林資源利用の歴史」	村上由美子
第 8 章	「動物遺存体からみた資源利用の歴史と多様性」	石丸恵利子
第 9 章	「縄文・近世・現代における中大型哺乳類の分布変遷」	辻野 亮
第 10 章	「栽培植物と雑草のきた道」	山口裕文
第 11 章	「現代方言からみた植物利用の地域多様性」	中井精一
コラム 3	「古人骨・遺跡出土動物骨ストロンチウム同位体比解析による結果(仮)」	古人骨班
コラム 4	「(未 定)」	

〈各章のキーワードと概要〉

第1章 湯本貴和・矢原徹一「日本列島の生物文化多様性と『賢明な利用』」

日本列島で人間の存在が確認されている最終氷期以降において、人間活動の影響で自然がいかに変遷してきたか、その過程で生物相の変化はどうであったのか、また、自然や個々の生物に関する人間の認識・知識・技術はいかなるものであったかを歴史的過程として復元し、今後の人間－自然相互関係がいかにあるべきかを考える礎を提示する。同時に、日本列島各地で培われてきた生物資源の持続的利用に関する知識と、過剰利用を抑制してきた重層する環境ガバナンスのあり方を類型化し、グローバル化した現代社会に適合する新たな環境ガバナンスとはいかなるものかを考える。

【キーワード】環境史、生物多様性、持続的利用

第2章 片山一道「日本列島に住む人々はどこから来たか」

日本列島に住み着いてきた人々の来歴については、多くの人類学者たちが生体計測学、骨学、あるいは人類遺伝学などの研究方法を駆使して、その命題に挑んできたが、いまなお多くの謎を残すのが実状である。基本的には「吹きだまり論」と「交代論」のはざままで議論が回転してきたが、一応のところは前者に近いところで決着しようとしている。そうすると、イギリス＝アイルランド諸島での人間史的状況と相似することになる。日本列島人の来歴について、英愛諸島との比較で再考しようとするのがねらいである。

【キーワード】縄文人、吹きだまり論、日本列島人

第3章 高原 光ほか「日本列島における最終間氷期以降の植生史」

化石花粉や大型植物遺体などの古生態学的な証拠に基づき、日本列島における(1)氷期－間氷期変動と植生変遷、(2)最終氷期最盛期の植生と refugia, (3)完新世における日本列島の植生形成過程について述べる。

【キーワード】氷期－間氷期変動、植生変遷、古生態学、refugia

第4章 村上哲明・瀬尾明弘ほか「DNA からみた植物の分布変遷」

約 150 万年前からの氷期・間氷期の繰り返しによって、植物はその地理的分布を大きく変化させてきたことが花粉化石情報などによって明らかにされている。ヒトも含めて動物は、生活における活動エネルギーを植物に依存している。したがって、植物の分布の変化は動物の活動および分布にも大きな影響を与えたはずである。特定の植物種群のみに依存している動物群ならなおさらである。本章では、日本列島に分布する様々な植物種、あるいはそれに依存する動物種の地理的遺伝構造を示し、それらの情報に基づいて日本列島における植物の分布変遷について考察をおこなう。

【キーワード】植物地理学、分子情報、遺伝構造、分布変遷

第5章 津村義彦・百原 新「植物化石とDNA からみた最終氷期最盛期のレフュジア」

これまで、最終氷期最盛期とその前後の植物化石記録や現在の森林の遺伝的多様性データに基づいて、温帯性植物の最終氷期最盛期のレフュジアの推定が別々に、行われてきた。最近では特に、遺伝解析技術の発展により、最終氷期最盛期以降の植物の移動の様子が解明されてきたので、化石記録と遺伝子データを統合することによって、より詳細なレフュジアの特定が可能となった。そこで本論ではスギなどの針葉樹やブナなどの温帯性落葉広葉樹を中心として解説する。

【キーワード】植物化石、マイクロサテライトマーカー、遺伝的多様性

コラム1 清水 勇「日本養蜂史にみる共生と攪乱」

養蜂の歴史は日本書紀に初めて表れるが、江戸時代には比較的高度な養蜂技術が発達していた。しかし、日本の養蜂はセイヨウミツバチが導入された明治10年(1877年)から激変する。人口の爆発と商品経済の発展は、効率の良い西洋養蜂を飛躍的に発展させ、和養蜂を衰退させた。これが社会と自然の生物多様性に及ぼした影響について考察し、養蜂という古来の人類の営みにおける「賢明なる利用」の変遷について考える。

コラム2 川瀬大樹「日本の蛇紋岩を例とした特殊土壌地域における固有植物」

蛇紋岩という岩石から作られる特殊な土壌環境は日本に数多く分布している。そこには多くの蛇紋岩地帯特有の植物が知られ、生物の固有性と多様性が高い。これらの植物がどのように生じ、分布を広げてきたのか、複数種について紹介する。

第6章 米田 穰・陀安一郎・日下宗一郎・石丸恵利子・片山一道・湯本貴和

「古人骨からみた日本列島の食生態の歴史的変遷(仮)」

日本列島におけるヒトの適応を、(1) 狩猟・採集・漁撈で天然資源を獲得した縄文時代、(2) 農民・漁民・商人などの社会的分業と物流が確立した江戸時代、そして(3) 世界中の食品が食卓に並ぶ現代を比較することで検討する。さらに、各時代の食生態における地理的変動と共通性を抽出し、地域環境をいかした生業の実態とその時代的変遷を、人体(古人骨、毛髪)のタンパク質に含まれる同位体を手かがりに復元する。

【キーワード】食生活・適応・同位体

第7章 村上由美子「木製品からみた森林資源利用の歴史」

日本列島各地の低湿地遺跡では、これまでに大量の木製品が発掘されており、樹種や用途を調べることによって木材利用の歴史が明らかになってきた。2009年公開予定となった遺跡出土木製品データベースの分析を通して、縄文時代から近世までの各時代に、どの樹種の

木材がどのように利用されてきたのか、地域ごとの傾向や時期差を抽出し、現在の植生が成立するまでに人間活動が与えた影響について考察する。

【キーワード】 木材利用, 遺跡出土木製品データベース, 主要樹種

第 8 章 石丸恵利子「動物遺存体からみた資源利用の歴史と多様性」

遺跡から出土する動物遺存体は、当時の人が食料や道具として獲得して利用した動物資源の情報を有する。出土動物の種構成の特徴やそこに残された人為的痕跡の観察から、人と動物との関わりを知ることができる。さらに安定同位体分析などの理化学的な分析視角によって、生業活動域の復元や動物資源の流通などへと考古学研究を進展させている。本稿では、中国四国地方の出土資料を中心に縄文時代から中世近世にかけての動物資源利用の歴史と多様性について概観する。

【キーワード】 出土動物種構成, 狩猟漁撈採集活動, 中国四国地方

第 9 章 辻野 亮「縄文・近世・現代における中大型哺乳類の分布変遷」

日本列島における中大型哺乳類の分布は過去の気候変動や人為的攪乱によって大きく変化してきたと考えられる。日本列島に人間が定住しだしたと考えられる縄文時代以降の中大型哺乳類の分布を既存のデータベースなどの結果を元に、縄文・江戸（1730 年代）・現代（1978 年と 2000 年頃）における中大型哺乳類の分布変遷を比較した。縄文・江戸期にはニホンジカとイノシシは北海道から九州まで幅広く分布していたが、現代ではシカは東北のほとんどの地域から、イノシシは東北と北海道で姿を消していた。一方、カモシカとクマ類はあまり分布が変化しなかった。

第 10 章 山口裕文「栽培植物と雑草のきた道」

人類が地球上に現れたのち、それまでにはなかった植物群が現れる。狩猟採集の時代に人間活動に伴って生じた攪乱環境に生育する植物とその後の農耕時代の主役を担う栽培植物である。農耕の展開に伴ってさらに生じた耕地という攪乱環境には雑草が現れる。この栽培植物と雑草という植物群は、植物の系譜（系統）とは独立して並行的に出現し、はじめは多様化し、現代にはモノカルチャーへと収斂する。日本を中心とした東アジア原産の栽培植物と外来の雑草の多様性を事例として人と植物との関係性の変化を論じる。

【キーワード】 栽培化、半栽培、野生化、植物利用

第 11 章 中井精一「現代方言からみた植物利用の地域多様性」

日本列島はユーラシア大陸の東端に位置し、亜熱帯から亜寒帯にいたる多様な自然環境のもと、地域ごとに多様な生業戦略を展開してきた。本論は、列島内部に存在してきた様々な

地域社会が、どのような資源管理と環境利用をしてきたかについて、日本各地に残存する植物方言語彙をもとに、語の史的変遷過程ならびに伝播経路の検討をもとに、社会言語学的観点から考察するものである。

【キーワード】 植物方言地図、資源管理、環境利用

コラム 3 古人骨班「古人骨・遺跡出土動物骨ストロンチウム同位体比解析による結果(仮)」

コラム 4 「未定」

*下記の3本は近畿班の方針によっては第1巻へ

高原 光, 佐々木尚子ほか「完新世後期における近畿地方の植生変遷と人間活動」

花粉分析や微粒炭分析の結果に基づき、丹後半島, 京都盆地, 琵琶湖周辺における完新世後期(約3000年前以降)の植生変遷と火の影響について述べる。

【キーワード】 植生変遷, 火と植生, 人為の影響

小椋純一「絵図や地図からみる京都盆地の景観史」

室町後期から江戸末期にかけて残された京都盆地の絵図類をもとにして、その資料性をさまざまな形で検証しながら、かつての植生景観を復原する。資料とする絵図類は、室町後期から江戸初期の洛中洛外図類のほか、円山応挙の風景画、名所図会類などである。一方、明治中期に測図された仮製地形図をもとにして、当時の文献や写真などからその植生記号の概念を明らかにしながら、その当時における京都盆地周辺山地などの植生景観を復原する。

【キーワード】 絵図類, 仮製地形図, 景観史

高原 光・奥田 賢「過去100年間の京都盆地周辺における植生景観の変遷」

空中写真や古写真, 古絵図などに基づいて明らかにした, 京都盆地周辺の各地域(東山, 西山, 妙法, 宇治)における過去100年間の植生変遷について述べる。

【キーワード】 植生復元, 空中写真, GIS

第 2 卷 『野と原の環境史』

編集責任: 飯沼賢司 (別府大学)、 佐藤宏之 (東京大学)

巻の趣旨:

日本列島のような温暖湿潤な気候では、極相となる植生は森林であり、海岸や高山地帯、河川敷あるいは火山の周辺などの限られた場所にしか、自然草原は成立しえない。したがって、現在存在している多くの草原は、人間の管理下にある半自然草原である。そのような半自然草原には最終氷期最盛期の冷涼乾燥時期に分布を拡大した動植物が遺存している。半自然草原は、その利用形態が狩猟、焼畑、放牧、観光、軍事など時代ごとに歴史的に変化したにも関わらず、現在まで維持されてきた。そこには、主に「野火」「野焼き」と呼ばれる火を使用した草原維持のシステムがあったと考えられる。本巻では、今は日本列島では存在していない最終氷期最盛期の草原の様相をサハリンや北海道のデータから復元するとともに、国内最大規模の半自然草原が残る九州中央山間地帯で、その草原の起源と成立、人間活動による維持のシステムを歴史、考古学、民俗学、地質学、生態学、地理学の学際的共同研究によって解明することをめざす。

目次:	(タイトル)	(執筆者)
序章	野と原の環境史年表	飯沼賢司・佐藤宏之
第 I 部	サハリン・北海道の最終氷期の人と環境	
第 1 章	サハリン・北海道の最終氷期最盛期の植生	五十嵐八枝子
第 2 章	後期更新世の環日本海地域における大型哺乳動物相の変遷	高橋啓一
第 3 章	旧石器時代の狩猟と動物資源	出穂雅実・山田哲・佐藤宏之
コラム 1	マンモスはなぜ絶滅したか	出穂雅実・佐藤宏之
第 II 部	完新世の温暖期における半自然草原の出現と環境変化	
第 4 章	堆積物が語る環境変遷と草原の出現	長谷義隆・宮縁育夫
第 5 章	日本列島における草原の歴史と草原の植物相・昆虫相	須賀 丈・丑丸敦史・田
中洋		
第 6 章	プラントオパールと花粉からみた草原の世界	佐々木章・佐々木尚子
コラム 2	微粒炭と黒ボク土	小椋純一
第 III 部	草原における土地利用と人間活動の歴史的変遷	
第 7 章	くじゅう・阿蘇の旧石器から古墳時代の遺跡とその立地	橘 昌信・下村 智
第 8 章	阿蘇下野狩神事から草原の歴史を読む	飯沼賢司
第 9 章	阿蘇山野の空間利用をめぐる時代間比較史—中世・近世・近代—	春田直紀
コラム 3	古代～中世の狩猟と草原	服部英雄

第IV部 草原利用の現状と未来

第10章 くじゅう・阿蘇の草原における植物利用の民俗	段上達雄
第11章 くじゅう・阿蘇の観光開発と草原入会地	中山昭則
第12章 阿蘇の草原植物の現状と花野の再生	瀬井純雄
コラム4 植生から見た野焼きの意義	生野喜和人
終章 野と原の「賢明な利用」と重層するガバナンス	飯沼賢司・佐藤宏之

各巻の編集責任者 **各章のキーワードと概要**(書式は標準の編成にあわせています)

(1章につき200字程度、コラムは100字程度、提示できる場合は節立ても)

序章 野と原の環境史年表

キーワード(3つ程度): 草原の歴史, 火山活動(災害)史, 牛馬史

本巻においては、先史時代と有史の時代の双方を取り扱い、草原に通史的な視点を提供する。前者においては、数万年単位のタイムスケールを、後者においては、数年単位のタイムスケールを使用する。通常、年表は事件史として作成されるものであるが、前者においては環境史・災害史の視点を取り入れることによって、年表への記述が可能となる。

特に、阿蘇地域においては、火山活動に人間の生活が影響を受けやすく、人間と環境のアノテーションを把握しやすい。また、支配者の変遷がシンプルであるため、重層するガバナンスを意識して環境史年表を作成しやすいことが特徴であり、歴史叙述を可能とする。

第I部 サハリン・北海道の最終氷期の人と環境

第1章 サハリン・北海道の最終氷期最盛期の植生

キーワード(3つ程度): タイガ, 寒冷・乾燥気候, 草原

当時2島の低地は永久凍土に覆われ、山岳には氷河が発達した。陸橋の成立により2島はシベリアと繋がった。2島から得られた花粉化石から見て、当時の森林は地域によって主構成種は異なるものの、現在北東シベリアに分布するグイマツ、ハイマツ、トウヒ属からなるタイガであった。同時に多種の草本からなる草原が北海道のほぼ全域に発達した。差右舷の発達はマンモスをはじめとする大型哺乳類の生存を可能としたことだろう。

第2章 後期更新世の環日本海地域における大型哺乳動物相の変遷

キーワード(3つ程度): 後期更新世, ナウマンゾウ, マンモス動物群

ここでは、旧石器時代の人々と自然環境との関係性を考察するために、特に大型哺乳動物に焦点をあてる。後期更新世の環日本海地域には、ナウマンゾウを伴う温帯性の動物群とその北側に位置する寒冷性のマンモス動物群がいた。これらは、地球規模の気候変動に応じて南北移動を繰り返していたが、後期更新世の終焉に始まった温暖化の中でゾウ類や大型のシカ類は絶滅し、現在の動物相となったことを示す。

第3章 旧石器時代の狩猟と動物資源

キーワード(3つ程度): 狩猟, 生態系, 行動戦略

後期旧石器時代、日本列島をとりまく自然環境は急激かつ短周期的な気候変動によって、主に本州島に広がる温帯と、主にサハリン－北海道－千島半島に広がる寒帯の二つの生態系が南北に移動を繰り返していたと考えられる。どちらの生態系においても、人々は狩猟と採集を主な生業としていたが、動物資源を含む様々な資源の配置と構成を熟知し、それぞれ異なる仕方で計画的な季節移動を繰り返しながら生活していたと考えられる。

コラム1 マンモスはなぜ絶滅したか

キーワード(2～3程度): 大型哺乳動物, 絶滅, 環境変動

後期更新世後半以降、地球上の生物の絶滅種数は加速度的に増加している。その中でも更新世末の大型哺乳類の絶滅は、極めて大きなイベントであった。ユーラシア大陸とアメリカ大陸を含む北半球のほとんどの地域で、草原に棲息していたマンモスゾウや毛サイなどの大型哺乳類は絶滅した。この絶滅イベントの原因は、人類による過剰殺戮、急激な環境変動、それらの組み合わせ等が考えられているが、いまだに結論は出ていない。さらに最近では、彗星衝突説が付け加わった。

第Ⅱ部 完新世の温暖期における半自然草原の出現と環境変化

第4章 堆積物が語る環境変遷と草原の出現

キーワード(3つ程度): 落葉広葉樹林, 常緑広葉樹林, 草原

ボーリングによる阿蘇の堆積物の調査によれば、最終氷期の21000年前ころは阿蘇のカルデラは大きな湖ではなく、川沿いに池や沼が点在していた。21000年以降約10000年前までに大きな湖が形成され、カルデラ斜面では、針葉樹を交える冷温帯落葉広葉樹林が温暖化によって落葉広葉樹林を主とする温帯林に変化した。8000年前以降は落葉広葉樹林でケヤキやエノキが優先し、その後、常緑広葉樹林のカシ類が増加する。一方、花粉の結果からみると、外輪山上では、約12000年ころから森林ではなく、草原景観が展開していた。それもススキを中心とするものとみられる。

第5章 日本列島における草原の歴史と草原の植物相・昆虫相

キーワード(3つ程度): 半自然草原, 火入れ, 黒ボク土

現在の日本列島では人為的攪乱がなければほとんどの場所で森林が成立する。しかしそうした場所にも氷期に分布を広げたとされる草原性生物が生き残ってきた。こうした生物は温暖な完新世をいかに生きのびてきたのだろうか。現在まで残る野草地や草原性マルハナバチ類の分布は、黒ボク土の分布とよく一致する。黒ボク土の成因として、人による火入れの関

与を重視する見解がある。日本列島では半自然草原の維持にこうした野火や放牧が、刈取りとともに深く関わってきた可能性がある。

第6章 プラントオパールと花粉からみた草原の世界

キーワード(3つ程度): 鬼界アカホヤ火山灰, 植物珪酸体, 微粒炭素

九重連山の北に広がる千町無田低地でのボーリング調査によると、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)(7300 cal BP) 降下前から常緑広葉樹林が存在する一方で、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草原が広がっていたことがわかった。K-Ah 降下後、大量の微粒炭が見られ、T2 火山灰(1500 cal BP 頃)降下直前に土壌化が進んだ。土壌層直下からはイネの珪酸体が産出し、マツ属花粉が目立つ。黒岳山麓のボーリング調査では、約1500年前以降には火事が断続的に起こり、草地をとまなう二次林が成立していたことが示唆された。この地域では、古代から水田開発が試みられるなど、人為による植生変化が起きていたであろう。

コラム2 微粒炭と黒ボク土

キーワード(2~3程度): 火, 微粒炭, _____

日本では、半自然草原が長期にわたって維持される背景として、ふつう火の存在がある。草原などの土壌中に含まれる微量炭の形態、微粒炭が多く出現しはじめる土層の年代などを調べることで、草原の歴史を知ることができる。

第Ⅲ部 草原における土地利用と人間活動の歴史的変遷

第7章 くじゅう・阿蘇の旧石器から古墳時代の遺跡とその立地

キーワード(3つ程度): 狩猟活動, 焼畑, 稲作

半自然草原が形成されていた阿蘇・くじゅうの高原地帯は、先史時代の主要な狩猟活動の場として利用されたと考えられる。寒冷期の遊動生活を基本とする旧石器時代と温暖化・定住化が進む縄文時代について、遺跡の分布・立地・様相、それと自然環境の成果を援用しながら活動の歴史的変遷を考察する。一方、弥生時代になると、集落はカルデラ内の台地部や低湿地部へと移動する。集落周辺での焼畑(鉄斧・手鎌)、低地部での稲作への挑戦(石包丁)、外周部での疎林や草原の管理にもとづく狩猟の活発化(鉄鏃の増加)など、環境への多様な対応を論じる。

第8章 阿蘇下野狩神事から草原の歴史を読む

キーワード(3つ程度): 野焼き, 狩神事, 牧

阿蘇では、2月~3月に下野三カ所の狩場で大規模な狩りが行われ、天正6年を最後に廃絶した。この狩りは、阿蘇の春を告げる祭りであり、この狩りの獲物を集めるために、野焼きが行われた。火で獣を追う焼き狩りの一種と解釈した。狩りのあとは、ここに阿蘇社の神馬の牧が立てられ、狩場の馬場は別名「鷹山の牧」と呼ばれた。さ

らに、鷹山は、阿蘇宮の田作りのための、姫神が住む山であり、その神が里に下りることによって、阿蘇の田の稔りがもたらされたという構図ができています。下野狩神事は、阿蘇地方の草原の利用の歴史が集約された神事といえる。そこには、草原と狩り、草原と馬、さらに草原と焼畑、水稻耕作への関係を示唆する史料が提示されている。本研究では、この神事の分析を通じて草原の歴史を解明する手がかりを得る。

第9章 阿蘇山野の空間利用をめぐる時代間比較史—中世・近世・近代—

キーワード(3つ程度): 空間利用, 環境認識, 入会権

阿蘇山(中央火口丘と外輪山の総称)は、文献史料が残る歴史時代を通して、人びとに利用されてきた。この空間はどの時代も史料上は「山」と「野」で表現されるが、そのことは時代を超え阿蘇山の森林生態系と草原生態系とが共に地域資源として利用されてきた事実を示す。だが、両生態系の分布が織りなす景観は時代とともに変動してきた。そこには、山野空間に対する利用目的や環境認識あるいは入会権などの所有法制の時代による違いが投影されていると考えられる。本章では、こうした問題を中世・近世・近代で相互に比較することで、同一地域における人為的自然利用の歴史的多様性を明らかにしたい。

コラム3 古代～中世の狩猟と草原

キーワード(2～3程度): 狩倉, 猪鹿, _____

中世の史料、地名から、狩倉と呼ばれる武士の狩場、演習地を取りあげ、中世の狩の実像に迫る。

第IV部 草原利用の現状と未来

第10章 草原の利用と開発の民俗

キーワード(3つ程度): 採草, 放牧, 水田開発

くじゅう山系と阿蘇山の草原の利用について、生業としての採草・放牧などの観点から見ていく。飯田高原のタデ原の採草地は劣悪な土質に適応した矮小化した茅を採取して蓑に編んでいたし、くじゅう山系や阿蘇山周辺では飼料用の草の採取と放牧が行われていた。年間を通しての草原の維持管理のシステムと周辺の村々の生業を考える。また、千町無田の明治期の水田開発や温泉苗代など、高原の草原開発についてもふれる。

第11章 くじゅう・阿蘇の観光開発と草原入会地

キーワード(3つ程度): 観光開発, 入会地, 牧野組合

阿蘇・くじゅう地域には広大な草地が分布するが、1964(昭和 39)年に開通した九州横断道路によって、我が国でも稀な景観として観光資源の価値が高まった。その結果、観光開発は草地に及び所有する牧野組合も対応に苦慮し、草地の一部を売却したケースも少なくない。しかし、その後の

経済・社会情勢の変化により、未だに放置されているケースも多く景観形成に大きな影響を与えている。

一方では、牧畜農業の不振と後継者不足から草地管理を支えてきた牧畜農家数が激減し、組合維持も困難な牧野組合もある。その結果、組合自らが観光的な草地経営を模索する動きが出てきている。観光開発が草地の維持とそれを組織してきた入会地にどのようなインパクトを与えてきたのか検討していく。

第12章 阿蘇の草原植物の現状と花野の再生

キーワード(3つ程度): 採草, 野焼き, 草原性植物

日本最大級の草原は、採草や野焼きなどの人間の営みと自然の力がバランスをとって維持されてきた半自然草原である。しかし、今この草原は農業の近代化による機械化、化学肥料の利用、畜産の低迷下によって、その存在価値が後退し、草原そのものの存在が危機に瀕している。このことが草原性植物の生きる場所を奪い、阿蘇特有の植生や希少植物の保護対策が緊急課題となっている。

コラム4 植生から見た野焼きの意義

キーワード(2～3程度): 野焼き, 湿原の維持, _____

別府市猪野瀬戸湿原で5年にわたって実験野焼きを続けている。自然に任せた場合、刈り取りをした場合、野焼きをした場合、植生にどのような変化が生じるかを明らかにする。

終章 野と原の「賢明な利用」と重層するガバナンス

キーワード(3つ程度): 半自然草原, 利用, ガバナンス

列島プロジェクトでは、日本列島の自然が人間の活動でいかに変化してきたのか、自然や個々の生物に関する人間の認識・知識・技術はいかなるものであったかを歴史的な過程として復元すべく研究を行ってきた。本巻では、サハリン班と九州班の成果を合わせて、旧石器の世界から現代までの草原を舞台とした自然と人間の営みを追いかけた。第一部は、サハリンの自然草原の動植物と人間活動を描き、第二部以降は、阿蘇・くじゅうという日本最大の半自然草原を対象に、人間の活動と草原、特に火の利用に注目し、「賢明なる利用」とはなにかを考えてきた。完新世期以降の半自然草原は狩猟という人間の営みと連動して出現したと考えられる。その後の草原の維持は、一定のガバナンスの下、狩猟、放牧、焼畑、水田経営などの人間の生活を支える活動に裏づけられていたが、今、その維持は、生業の後退にともない、危機に瀕している。それは、とりもなおさず、草原に生きてきた草原性動植物の危機でもある。本巻では、「草原」の歴史的変遷を追う中で、人間の失敗、営みの知恵を明らかにし、人類の未来への指針を探したい。

全体会議で検討したい事項：

- ① 研究全体の中でのサハリン班、九州班の役割。すなわち、第二巻の位置づけ。
- ② 13000年ほど前に増加する微量炭の原因は人為的の火事か。
- ③ 伝承の有効性、縄文の記憶は伝承となるのか。

〈誌上報告:サハリン・沿海州班の活動について〉

1. 研究内容と進捗状況

1-1 研究の内容と方法

本研究は、環日本海北部地域における後期更新世の自然環境変動とそれに伴う動植物(相)資源環境の変化が、旧石器時代の人間活動とその文化・社会形成にどのような影響を与えたかについて、現代的な視点と分析から評価することを目的とする。この目的のもと、対象地域の旧石器遺跡・動物化石・花粉化石等の既存資料のデータベース化を行い、その過程で予測されるデータ不足地域を主とした新たな分析データの獲得による体系的なデータベースの整備を実施している。これら諸成果の包括的かつ統合的な分析によって、より緻密かつ多角的な説明モデルの提示が可能となると期待される。

今年度は、1) 忠類ナウマンゾウ産出地点の年代決定、および2) 環日本海北部地域各地の既存データの現時点での集約の2点を主な研究項目として実施している。

1) 忠類ナウマンゾウ産出地点の年代決定

2008年3月に、2007年11月発掘調査の中間成果報告会を北海道開拓記念館でおこなった。会議では、ナウマンゾウ産出層準の年代決定および古環境復元に関する研究成果の中間報告がなされた。結果、年代決定および古環境復元の両者についてほぼ見通しがついたが、それらの見通しをさらに確実なものにするため、堆積層相のより詳細な記載および産出層準前後のテフラ層の確認を再度おこなう必要性が指摘された。

この指摘を踏まえ、幕別町教育委員会および北海道開拓記念館など関係諸機関の協力の下、2008年8月8日から11日の間、昨年度調査地点の隣接地点のトレンチ調査を下記の体制で再度実施した。

高橋啓一 (サハリン班, 動物相担当)

出穂雅実 (サハリン班, 考古担当)

早田 勉 (サハリン班, テフラ担当)

添田雄二 (北海道開拓記念館, 現場責任者)

廣瀬 亘 (北海道立地質研究所, 層序・堆積構造担当)

里口保文 (滋賀県立琵琶湖博物館, 層序・堆積構造担当)

トレンチ調査の結果、層相の詳細な記載と堆積構造の解釈を現場で実施することができ、

産出層準前後のテフラサンプリングも実施することが出来た。また産出層準前後には、ゾウを含む足跡化石が複数確認された。この成果を受けて、12月5日に地球研で発掘調査報告書作成に向けた会議を実施する予定である。報告書は今年度中を目処に執筆をおこない、来年度刊行予定で作業を進めている。

なお今年度は、町立忠類ナウマンゾウ記念館開館20周年にあたるため、北海道開拓記念館との共催で、8月10日に高橋啓一(サハリン班)および湯本貴和による記念講演会を実施し、発掘調査の現地説明会を実施した。多くの熱心な町民の参加があり、地元から発見されたナウマンゾウ化石への関心の高さを実感できた。また来年は、忠類ナウマンゾウ発見30周年にあたるため、北海道開拓記念館で特別展を実施する予定であり、湯本・佐藤・高橋・出穂が北海道民に向けた講演をおこなう予定である。

1-2 プロジェクト終了までに期待できる成果

日本列島の最初の本格的な人類文化は、現代人(現生人類)の登場に伴う後期旧石器時代の開始にある。現代人のアフリカ単一起源説が確実視されている現在、列島への現代人の拡散ルートには、南島ルート・朝鮮半島ルート・サハリンルートの3つが想定されているが、サハリンルートに関しては、考古学的情報とその背景となる古生態情報のいずれもが従来不足していた。環日本海北部地域の総合的研究を推進することにより、その実態の解明が著しく推進され、現代人の北方適応の問題に大きく寄与できることが期待される。

1-3 今年度の研究成果の発信

1) 研究集会の開催

2008年3月18日(火) 忠類調査研究成果中間報告会 開拓記念館

2008年11月22日(土)～23日(日) 国際シンポジウム

「環日本海北部地域の後期更新世における人類生態系の構造変動」東京大学本郷キャンパス
2008年12月5日 忠類調査成果発表会 地球研

2) 地域での成果報告会

2008年8月10日(日) 忠類ナウマンゾウ博物館開館20周年記念講演会および現地説明会

3) 刊行物

五十嵐八枝子. 2008. 利尻島の種富湿原における後期完新世の植生変遷史. 利尻研究, 27, 1-7.

五十嵐八枝子(受理) 北西太平洋・鹿島沖コア MD01-2421 の MIS6 以降の花粉記録: 陸域資料との対比. 地質学会誌特集号.

出穂雅実・赤井文人・高瀬克範(編). 2008. 特集: 北海道勇払郡厚真町上幌内モイ遺跡旧石器地点の調査研究. 論集忍路子 II.

- 出穂雅実・小田寛貴. 2008. 北海道勇払郡厚真町上幌内モイ遺跡旧石器地点の放射性炭素年代. 論集忍路子 II, 13-18.
- 出穂雅実・廣瀬亘・佐藤宏之. 2008. 北海道における考古学的黒曜石研究の現状と課題. 旧石器研究 4, 107-122.
- 出穂雅実・赤井文人. 2008. 滝上町の先史時代. 滝上町郷土史研究会.
- Gillam, C., Tabarev, A. V., Izuho, M., Nakazawa, Y., Tsogtbaatar, B., and Chen, Q.. 2008(In print). The Far East Archaeological Database (FEAD): A Minimum 1-Minute Resolution Dataset for Exploring the Big Picture. Current Research in the Pleistocene, Vol. 25.
- Izuho, M., Nakazawa, Y., and Akai, F., Soda, T., and Oda, H. 2008(Submitted). Geoarchaeology of Kamihoronai Moy Upper Paleolithic site, Hokkaido (Japan). Geoarchaeology: An International Journal.
- 佐藤宏之編 2008 日本第四紀学会シンポジウム『考古遺跡から何がわかるか? - Geoarchaeology -』予稿集、日本第四紀学会、46p. 東京 (編著)
- 佐藤宏之編 2008 『<伝播>を巡る構造変動-国府石器群と細石刃石器群-』(公開シンポジウム予稿集)、東京大学大学院人文社会系研究科、109p. 東京 (編著)
- 佐藤宏之編 2008 『縄文化の構造変動』六一書房、210p. 東京(編著)
- 佐藤宏之 2008 「日本列島における東北地方の考古学的位置」『研究紀要』7号、25-31頁、東北芸術工科大学東北文化研究センター、山形
- 佐藤宏之 2008 「東アジアにおける後期旧石器時代の形成」『異貌』26号、2-15頁、共同体研究会、 神奈川
- 佐藤宏之 2008 「考古学から見た紀元前1万年の世界」『紀元前1万年』劇場プログラム、20-21頁、松竹、東京
- 佐藤宏之編 2008 『環日本海北部地域の後期更新世における人類生態系の構造変動』国際シンポジウム予稿集、総合地球環境学研究所、京都 (編著)
- 高橋啓一・北川博道・添田雄二・小田寛貴 2008 北海道、忠類産ナウマンゾウの再検討. 化石, 84, 74 - 80.

4) 学会・シンポジウム発表

- 五十嵐八枝子・高原 光・片村文崇・池田重人・竹原明秀・Mikishin, M. Y., Klimin, M., Bazarova, V. 2008. 極東における最終氷期以降の植生変遷 2 - サハリン. 第 55 回日本生態学会大会講演要旨集, 344.
- Igarashi, Y., Yamamoto, M., Irino, T., Oba, T. 2008. Millennial-scale climate variability in northwest Pacific inferred from high-resolution pollen records of IMAGES cvore MD01-2421. Work shop abstract of "High-resolution Pollen Records and Reconstruction of Vegetation Changes during Dansgaard-Oeschger events. 26-27, Bordeaux I University, France.
- 五十嵐八枝子. 2008. 鹿島沖コア MD01-2421 の花粉からみた北西太平洋における過去 144, 000 年間の気候変動. 日本第四紀学会講演要旨集 50-51.
- 五十嵐八枝子. 2008. 北海道北部・剣淵盆地第 2 地点から得られた MIS6 以降の植生変遷史. 日本植生史学会第 23 回大会講演要旨集 19-20.
- 五十嵐八枝子. 2008. サハリンと北海道の 4 万年前以降の気候と植生の変遷. サハリン・沿海州班国際シンポジ

地球研プロジェクト「日本列島における人間－自然相互関係の歴史的・文化的検討」(列島プロ)

ウム『環日本海北部地域の後期更新世における人類生態系の構造変動』講演要旨集.

出穂雅実・佐藤宏之. 2008. 日本第四紀学会シンポジウム「考古遺跡から何がわかるか? : Geoarchaeology」オーガナイザー, 日本第四紀学会.

出穂雅実・中沢祐一. 2008. 北海道上幌内モイ遺跡旧石器地点の自然形成過程. 日本第四紀学会シンポジウム「考古遺跡から何がわかるか? : Geoarchaeology」予稿集 16-31.

中沢祐一・出穂雅実. 2008. 北海道上幌内モイ遺跡旧石器地点の文化形成過程. 日本第四紀学会シンポジウム「考古遺跡から何がわかるか? : Geoarchaeology」予稿集 32-44.

森先一貴・佐藤宏之・Popov, A. N.・Mikishin, Y. A.・出穂雅実・山田哲・Malkov, S. S.・Batarshv, S. V.. 2008. 2007年沿海州ハサン地区一般調査報告. 第9回北アジア調査研究報告会 50-53.

Izuho, M. and Sato, H.. 2008. Landscape Evolution and Culture Changes in the Upper Paleolithic of Northern Japan. The Current Issues of Paleolithic Studies in Asia; Proceedings of the International Symposium "The Current Issues of Paleolithic Studies in Asia and Contiguous Regions". Edited by A. P. Derevianko and Shunkov, M. V. Publishing Department of the Institute of Archaeology and Ethnography SB RAS. 69-77. Novosibirsk.

出穂雅実. 2008. 原因は宇宙から降ってきた: 米国における 12.9ka のクロヴィス彗星衝突説. 研究集会「日本の半自然草原の歴史」・公開シンポジウム「阿蘇・くじゅうの草原の歴史と未来をさぐる」発表要旨集. 143-146.

Izuho, M.. 2008. Pre- to Early Upper Paleolithic in Northeast Asia: a review of Geochronological evidence. The 1st Seoul Paleolithic Conference "Diversity and Variability of the East Asian Paleolithic" Seoul National University.

佐藤宏之 2008 「環日本海地域における細石刃石器群の〈伝播〉と構造変動」公開シンポジウム『〈伝播〉を巡る構造変動-国府石器群と細石刃石器群-』予稿集96-109頁、東京大学大学院人文社会系研究科

佐藤宏之 2008 「地考古学が考古学に果たす役割」日本第四紀学会シンポジウム『考古遺跡から何がわかるか? -Geoarchaeology-』予稿集2-3.

福田正宏・I. Shevkomud・大貫静夫・佐藤宏之・熊木俊朗・高橋 健・内田和典・森先一貴・國木田大・吉田邦夫 S. Kosityna・M. Gorshkov・E. Bochkareva・辻誠一郎・A. Konopatskii 2008 「東シベリアとアムール下流域との先史狩猟採集民間にみられる交渉関係史の解明」第75回日本考古学協会総会『研究発表要旨』100-101頁

佐藤宏之 2008 「環日本海北部地域の後期更新世における人類生態系の構造変動」国際シンポジウム『環日本海北部地域の後期更新世における人類生態系の構造変動』予稿集、総合地球環境学研究所

高橋啓一 2008 後期更新世の環日本海北部地域における大型哺乳動物相の変遷」国際シンポジウム『環日本海北部地域の後期更新世における人類生態系の構造変動』予稿集、総合地球環境学研究所

山田 哲 2008 「環日本海北部地域の細石刃石器群の行動論」国際シンポジウム『環日本海北部地域の後期更新世における人類生態系の構造変動』予稿集、総合地球環境学研究所

5) 地域での成果報告会, 新聞掲載, TV・ラジオ出演等

高橋啓一. 2008. 忠類のマンモスゾウ化石北海道の巨象たちが語るもの. 北海道新聞 7月15日夕刊.

新聞記事：「歴史に探る気候変動（上）」 朝日新聞 7月9日朝刊

「幕別町忠類 ナウマン象足跡化石か」北海道新聞 8月11日朝刊

「太古のロマン今なお」北海道新聞十勝帯広版 8月11日夕刊

「ナウマンゾウ、忠類に足跡残す?!」十勝毎日 8月11日朝刊

「ナウマンの足跡?興味津々」北海道新聞 8月12日朝刊

2. 今後の活動

2-1 今後の取り組みと具体的な活動内容

2009年度の主な研究目標は次のとおりである。

- 1) 忠類ナウマンゾウ発掘調査報告書の作成と刊行。
- 2) 動物相・植物相・景観・文化のそれぞれについて研究の完成に向けた補足調査の実施。

先に述べたとおり、この全体集会と相前後してそれぞれの成果と課題が明確になるため、それに基づいて来年度の具体的な活動を実施してゆきたい。

2-2 研究遂行上の問題点と解決策

研究対象とする地域は、資料の粗密および分析精度の差異に基づいた資料精度の分解能が異なることが予想されている。従って、これらのデータを①複数の方法から地質学的対比が行われている確実なデータ、②さらなる検証が望ましいデータ、③ある一つの視点から提示されただけで他の視点から検証がなされていない不確実なデータ、の三者にわけて整理し研究を進める。

しかしながら、この整理だけでは最終的な解決にならないのは明白である。不確実なデータであろうとも重要な地域や空白地域のデータである場合も予想されるからである。従って、最終的な成果の提示方法は、研究の進展に合わせて検討を継続する予定である。

〈誌上報告:九州班の活動について〉

1. 研究内容と進捗状況

1-1 研究の内容と方法

九州班では、九州の背骨ともなっているくじゅう・阿蘇の中央山地の草原地帯に焦点を当て、そこで展開された人間と自然の相互関係の長い歴史を歴史学・民俗学・考古学・地理学・自然科学・植物学・地質学などの諸分野の学際的、総合的に検討する中で、「賢明なる利用とはなにか」を明らかにしようと考えている。

そこでの検討課題は「火と水の利用」の問題を設定してきた。この一帯には、広大な日本での最大の草原すなわち「野」が広がっている。この地域の温度と雨の状況をみたとき、森

が形成されるのが自然であり、そこでの草原は不自然な景観（半自然草原）であることは明らかであり、現にこの景観は野焼きという「火の利用」によって維持されている。本研究では、ひとつにはこの広大な野がいかなる必要から、人との関係において、いかに形成されたのか、火との関係はどうであったのか、その利用はどのように変遷してきたのかを、少なくとも縄文時代から現代までのタイムスケールの中で明らかにしたい。

一方、この一帯の周辺は、その山の存在によって、豊富な水が湧き水や川のかたちで供給される場所であった。水は人間にとって欠くべからざる存在である。この水とこの一帯の人々はどのように付き合い、利用をしてきたのであろうか。土地利用としては水田開発がメインであり、草原の利用の対局として水田開発の歴史を明らかにしたいと考えている。「火の利用」と「水の利用」は、一見バラバラの問題のように思われるが、阿蘇宮の神事では、火の神事と水の神事が見事に融合されている。

しかし、縄文時代から現代という長いスケールの中で火と水の両方の問題を論ずることは期間の中ではむずかしい。そこで、残された2年の中で、今後の進め方としては、中心命題である火と草原との関係、そして、その利用を主軸に研究を進めることにした。9月に阿蘇で開催した研究集会は「半自然草原の歴史」として、「野焼きによって維持されてきた「半自然草原」はいつから形成され、そこはどのように利用されてきたのであろうか。」を課題とした。

昨年からはじめたボーリング調査と発掘調査で得たコアの本格的分析が開始され、くじゅう・阿蘇の草原地帯の1万年の植生の変化を復元できる可能性が出てきた。くじゅうのデータに加えて今年度は新たに長谷義隆氏・宮縁育夫氏を加え、阿蘇のデータの分析がなされた結果、1万年以上前に草原は形成されていたとの可能性が指摘された。9月の阿蘇での研究集会では、火と草原形成の関係を明らかにするため、黒ボク土と微粒炭の関係、草原形成と火事の問題を考える報告が用意された。

さらに、別府市猪の瀬戸で行っている実験野焼き(5年間)は、野焼きは植生環境に与える影響を検証し、この研究において野焼きの歴史の裏づけをとる重要な研究となるはずである。今年度の最後2009年3月には、椎葉方面へ調査を進める計画を立てたが、阿蘇およびその周辺の原野の研究がまだ十分でないので、中世の史料で三国(肥後・豊後・日向)の広野といわれた阿蘇の波野村、大分県竹田市域、高千穂の草原、畑地に注目し、「阿蘇、くじゅうを中心とした半自然草原」の歴史的・文化的検討で全体をまとめることにしたい。

1-2 プロジェクト終了までに期待できる成果

上記のような研究計画の中で期待できる成果としては次のようなことがあげられる。

- ① 日本における半自然草原形成の時期の確定
- ② 半自然草原は人間による火と関係して形成されたのか。
- ③ 旧石器時代と縄文時代の変化と半自然草原との関係を考察する。

- ④ 縄文時代、弥生時代の用具と狩猟、草原との関係を考える。
- ⑤ 狩猟と野焼きの関係を明らかにする。
- ⑥ 火入れと焼畑の関係を明らかにする。
- ⑦ 牛馬の移入の時期と牧と草原維持の解明。
- ⑧ 神事における野焼き、狩、放牧の意味の解明。
- ⑨ 現代的な草原維持の機能—観光・軍事の解明。
- ⑩ 草原維持の機能の歴史的変遷の解明。
- ⑪ 10000 万年の植生環境の変遷の解明。
- ⑫ 野焼きが植生環境に与える影響の解明。

1-3 今年度の研究成果の発信

【刊行物】

『研究集会 日本の半自然草原の歴史—発表要旨集』(2008年9月13日～15日)

宮縁育夫・杉山真二(2008)阿蘇火山南西麓のテフラ累層における最近約3万年間の植物珪酸体分析. 地学雑誌, 117(4), 704-717.

宮縁育夫・寺田暁彦(2008)阿蘇火山中岳第1火口で採取された湖底堆積物(予報). 日本火山学会2008年秋季大会講演予稿集, 39.

宮縁育夫・杉山真二(2008)阿蘇カルデラ東方および西方域における過去約3万年間の植物珪酸体分析. 日本植生学会第23回大会講演要旨集, 29-30.

Miyabuchi, Y., Ikebe, S. and Watanabe, K. (2008) Geological constraints on the 2003-2005 ash emissions from the Nakadake crater lake, Aso Volcano, Japan. *Journal of Volcanology and Geothermal Research*, 178(2), 169-183.

宮縁育夫・池辺伸一郎(2008)阿蘇火山中岳で2008年2月に噴出した火山灰. 火山, 53(6), 印刷中.

打越山詩子・長谷義隆・宮縁育夫・佐々木尚子・野口絵梨・岩内明子(2008)九州阿蘇カルデラ、最終氷期以降の環境変遷と湖消滅過程. 日本地質学会第115年学術大会(秋田)講演要旨, 269.

【学会・シンポジウム発表】

Hase, Y., Miyabuchi, Y., Uchikoshiyama, U., Sasaki, N. and Iwauchi, A., 2008, Environmental change and the process affecting the reduction of the Aso Caldera lake after Last Glacial Age in central Kyushu, Japan. 33th IGC, in Oslo, Norway, 6th -14th August.

Miyabuchi, Y., Watanabe, K. and Okamoto, S. (2008) Volcaniclastic deposits discovered in the western part of Aso caldera, Japan: implications for hazard assessment. IAVCEI 2008 General Assembly Abstracts, Reykjavik, Iceland, Poster Session III, 48.

Miyabuchi, Y. (2008) Tephrastratigraphic constraints on post-caldera eruptive activity of Aso Volcano, Japan. IAVCEI 2008 General Assembly Abstracts, Reykjavik, Iceland, Oral Presentations Friday, 15.

熊本中世史研究会例会発表 2008年5月10日、飯沼賢司 「阿蘇下野の狩から草原の歴史を読む」

【地域での成果報告会】

「研究集会 日本の半自然草原の歴史」2008年9月13日～15日

9月13日 公開シンポジウム「阿蘇・くじゅうの草原の歴史と未来をさぐる」

長谷義隆「堆積物が語る阿蘇の環境変遷と草原の出現」 コメント 宮縁育夫

橘 昌信「阿蘇・くじゅうの草原の先史－旧石器・縄文時代遺跡－」 コメント 下村 智

飯沼賢司「阿蘇・下野狩神事から草原の歴史を読む」 コメント 春田直紀

9月14日ワークショップ「歴史時代の火と人」

服部英雄「中世の狩猟」

永松 敦「九州山間部の火の利用－野焼きと狩猟－」

佐々木 章「雑穀と米－分析の世界から」

2. 今後の活動

2-1 今後の取り組みと具体的な活動内容

本年度の今後の取り組みとしては、昨年、十分にできなかった三月の野焼きの時期に合わせて、野焼きや火ぶり神事の民俗、歴史の調査を実施する。さらに、今年度から、来年度にかけて、中世の史料で三国（肥後・豊後・日向）の広野といわれた阿蘇の波野村、大分県竹田市域、高千穂の草原、畑地に注目し、調査を実施し、最終年度に向けた報告を意識した研究の総括を行う。

2-2 研究遂行上の問題点と解決策

- ① ボーリング調査と分析調査は草原形成を解明する上で、必要なくべからざる手段であるが、費用と時間がかかるため、問題となっている。大がかりなものではなく、ハンドボーリングも併せて効率よい調査を実施する。
- ② 発掘によって草原環境を解明するむずかしさがある。発掘の場所、方法の検討が必要。

第 3 卷 『林と里の環境史』

編集責任: 大住克博 (森林総合研究所)、 湯本貴和 (総合地球環境学研究所)

巻の趣旨: 日本列島の森林は最終氷期最盛期以降の気候変動で大きく姿を変えてきたが、人間活動が盛んになるにつれて、むしろ人間の資源利用による森林の改変が林のかたちを決めるものとなった。とくに中世あるいは近世以降では、関東や近畿で水田耕作を維持するために必要な燃料や飼料・肥料、道具などの原材料を得て、その一部を都市圏に流通させる商品生産の場として、林が利用されてきた。この巻では、古代には建築材供給の場であったが、近世や近代ではむしろ薪炭材を安定的に提供するように改変されてきた近畿の山林を中心に、森林の歴史と人間活動について論じる。

目次:	*は仮	(タイトル)	(執筆者)
序章		林と里の環境史年表	大住克博・湯本貴和・(*環境史WG担当者)
第I部		森林・植生変化の通史	
第1章		完新世後期における近畿地方の植生変遷と人間活動	高原 光
第2章		絵図や地図からみる京都盆地の景観史	小椋純一
第3章		過去 100 年間の京都盆地周辺における植生景観の変遷	高原 光・奥田 賢
		* 1～3章の位置づけ、掲載巻については、さらに調整を行う。	
第4章	*	遺跡データにもとづく近畿の環境史・災害史	辻本裕也氏(交渉中)
第5章	*	入会について	未定
第II部		林野利用の実際	
第6章		都市需要に組み込まれた里山-直結された京都と京阪奈丘陵	伊東宏樹・佐久間大輔
第7章		作業日記からみた里山利用	堀内美緒
第8章		古民家の建築材からみた里山利用	奥 敬一・大場 修・杉山淳司・村上由美子
コラム1		京都北部の植物利用の民俗	井之本 泰
第III部		都市と経済がつくる林と里の姿	
第9章		古代・中世の開発と里山	水野章二
コラム2		製材技術の歴史と木材利用	村上由美子
第10章		池田炭・枝炭にみる地域特産商品と里山	佐久間大輔・伊東宏樹
コラム3		資源利用と萌芽	大住克博・佐久間大輔
第11章		吉野地域における林業と木地屋－都市商人の関与－	森本仙介
第12章		近畿地方の森林利用に関する比較研究	深町加津枝・奥 敬一
	*	コラム4 近畿はどこまでも金にまみれた土地である、論	中井精一(交渉中)
終章		林と里の「賢明な利用」と重層する環境ガバナンス	大住克博・湯本貴和

〈各章のキーワードと概要〉

序章 林と里の環境史年表

大住克博・湯本貴和・(*環境史 WG 担当者)

*これは年表そのものか？ それとも年表の総括、あるいは年表をもとにしたコメントか？ 序章という位置づけであれば、三巻としての問題提起をする章と考えるが？ あるいは年表を参照、コメントしながら、それを下敷きに問題提起をするということか？

【キーワード】 林, 里, 環境史

第 I 部 森林・植生変化の通史

花粉・遺跡・文献・絵画・地図などをエビデンスとした切り口から、近畿の森林・植生の変化を眺望する。

第 1 章 高原 光 「完新世後期における近畿地方の植生変遷と人間活動」

花粉分析や微粒炭分析の結果に基づき、丹後半島、京都盆地、琵琶湖周辺における完新世後期(約 3000 年前以降)の植生変遷と火の影響について述べる。

【キーワード】 植生変遷, 火と植生, 人為の影響

第 2 章 小椋純一 「絵図や地図からみる京都盆地の景観史」

室町後期から江戸末期にかけて残された京都盆地の絵図類をもとにして、その資料性をさまざまな形で検証しながら、かつての植生景観を復原する。資料とする絵図類は、室町後期から江戸初期の洛中洛外図類のほか、円山応挙の風景画、名所図会類などである。一方、明治中期に測図された仮製地形図をもとにして、当時の文献や写真などからその植生記号の概念を明らかにしながら、その当時における京都盆地周辺山地などの植生景観を復原する。

【キーワード】 絵図類, 仮製地形図, 景観史

- * 上記の内容は、近刊『古都の森を守り活かす』の内容と共通するところが少なくないこと、また、現在は古生態班に属していることから、古生態班の関係で執筆するという案もある(小椋氏コメント)
- * 一方、小椋氏の論文は三巻でも欲しい。位置は第 II 部でもよいのでは。高原・奥田氏の章と整理しなおし、1章+1コラムにしてはどうか。

第 3 章 高原 光・奥田 賢 「過去 100 年間の京都盆地周辺における植生景観の変遷」

空中写真や古写真、古絵図などに基づいて明らかにした、京都盆地周辺の各地域(東山、西山、妙法、宇治)における過去 100 年間の植生変遷について述べる。

【キーワード】 植生復元, 空中写真, GIS

- * 小椋氏の章との調整が必要

第4章 *辻本裕也「(仮)遺跡データにもとづく近畿の環境史・災害史」

【キーワード】 災害史, 過剰な利用, 遺跡データ

第5章 「(仮)入会について」

入会の起源、発達、変容と近代の入会制度への連関など・・・

【キーワード】 入会制度, 草地, 過剰な利用

第Ⅱ部 林野利用の実際

具体的なひとつの地域-集落レベルで行われていた里山利用の固有性・多様性の実態を精査する。

第6章 伊東宏樹・佐久間大輔「都市需要に組み込まれた里山-直結された京都と京阪奈丘陵」

京阪奈丘陵から南山城にかけての地域は、木津川水運により大都市京都に直結され、さらにその先には天下の台所大坂を抱えていた。その結果、江戸中後期には農作物だけでなく、薪炭、竹材、果樹林、畔の柿に至るまで、換金性の高い「商品作物」となり、里山環境は相当程度経営的に改変されている。都市周辺の里山は必ずしも安定的に営まれた自給的な空間ではなく、都市という市場の動向によって左右され、大きく変遷する空間である。

【キーワード】 薪炭林, 都市と里山, 水運

第7章 堀内美緒「作業日記からみた里山利用」

作業日記の解析から、旧志賀町における明治後期～大正期の稲作農家、山人による里山資源の利用の実態についてのべる。生業・生活の中で利用されていた里山資源の種類と、資源を取りに行っていた場所の分布・頻度を示す。これらは、なるべく農業とのつながりを意識しながら記述したい。このような資源を持続的に利用するための地域の知恵(ワイズユース)はどうだったのか?という点については、日記では限界があるので、聞き取り調査から分かっている昭和初期の里山資源に関する技術的な話(運搬具で伐採量が制限されていた)、制度的な話(様々な山の利用の取り決めがあった)から、結果としてワイズユースを支えるような社会的なしくみがあった…というようなことを述べる予定。この地域は江戸時代の絵図および読み下し済みの古文書、明治初期の統計資料が残っているので、その頃の山の様子(今と違って、かなり柴山だった)を示しておくことも可能。

【キーワード】 _____, _____, _____

第8章 奥 敬一・大場 修・杉山淳司・村上由美子「古民家の建築材からみた里山利用」

丹後半島山間部集落の古民家1棟を解体し、部材の樹種等を調べるとともに、建築時の状況についての聞き取り調査などにより、建築に用いられた森林資源やその利用技術、仕組みの実態を明らかにした。屋根材にササを用いる習慣は、ササが定期的に刈りとられる里山林

を村落周辺に広域に生じさせていたことが示された。また、建物本体にはマツ、クリが多く使われていたが、屋根の小屋組みに使われている部材には、周辺里山林に一般的な雑多な樹種が使われており、「民家は里山の雑木林そのもの」とでも言えることが示された。こうした成果から、数十年前の当該地域の里山林の様子を推定した。

【キーワード】 古民家, ササ葺き, 樹種鑑定

コラム1 井之本 泰「京都北部の植物利用の民俗」

京都府北部の丹後半島山間部・宮津市世屋地区における、フジ・シナ・マタタビ・ガマ・ミノグサなどの周辺の里山から採集した植物繊維の利用をとおして、自然と寄り添いながら、山村生活が展開されていたかを紹介する。

【キーワード】 _____, _____, _____

第Ⅲ部 都市と経済がつくる林と里の姿

都市の権力・経済力が収奪しあるいは育てた森林と里山社会の姿を、流通実態も含めて見直す。「都市的な需要」があつてこそ、奥山の消費と生産基地としての整備が進んだというような議論ができるかどうか。中部版とも重なるが、ここでは里山との対比ができるよい。例えば里山の消費圧は地域+場所により都市、一方、奥山の消費圧は都市中心、となるか？

第9章 水野章二 「古代・中世の開発と里山」

徴税対象になりにくい山野については文献史料が少なく、従来より耕地所有との相違などが強調されてきたが、平安末期には、中世村落の不可欠の構成要素としての里山空間（史料上では近隣山・後山など）が確認できるようになる。畿内周辺地域では、開発の進展の中で、材木を切り出すために設定されていた杣が転化し、良材を遠隔地に求めねばならなくなるとともに、里山をめぐる紛争も引き起こされる。その過程で、山林資源維持・確保のためのさまざまなシステムが構築されていく。

【キーワード】 後山, 中世村落, 杣

コラム2 村上由美子「製材技術の歴史と木材利用」

遺跡出土木材に残る痕跡から、古代の伐採技術や製材の工程を読み取り、楔を使う打割製材の技術を復原する。また中世には製材に大鋸が導入されて製材技術に変化が起こるが、それが木材利用に与えた影響を考える。

【キーワード】 打割製材, 大鋸の導入, 挽割製材

第10章 佐久間大輔・伊東宏樹 「池田炭・枝炭にみる地域特産商品と里山」

大坂市場には都市の需要を満たすため大量の薪炭が瀬戸内一円、土佐や日向から集まっていた。その一方で、大阪周辺には池田炭、枝炭（光滝炭）といったブランド化した高級茶炭

が誕生する。市場での選別が進む中で里山からの生産物が特産商品の生産にむかうのは農産物と何ら変わりがない。特産化するためには、炭焼きといった加工技術だけでなく、素材の品質を改良する短伐期の萌芽施業といった生産基盤技術の発展を伴っている。この生産体系が、「台場くぬぎ」という北摂の風物を築き、現在にまでつながる低林の風景をうんでいる。

【キーワード】 萌芽施業, 特産商品, クヌギ, 菊炭,

コラム3 大住克博・佐久間大輔 「資源利用と萌芽」

里山林で広く行われた萌芽の資源利用に注目し、それが地域の住民生活や産業に対し、均質な資源を大量に確実に生産する手段として有効に機能していたことを示す。また、伝統的な萌芽林管理手法は、対象とする樹種を選択し、その生態についての知識をもとに組み立てられていたことを示す。

【キーワード】 萌芽, 持続的利用技術

第11章 森本仙介 「吉野地域における林業と木地屋－都市商人の関与－」

木材の商品化が進んだ吉野東部に対し、西部は深い谷のために出材が難しく、人工造林の遅れた地域である。そのため西部では雑木林を含めた多様な山林利用が残っていた。その林産物の産地化には下市や五條、高野山の間屋が消費地である都市との仲介役として果たした役割が大きい。直接的、間接的に商人資本が入ることにより、木地屋集落における大規模な賃労働、需要を迅速に反映する生産－流通システムが確立されることになった。

【キーワード】 外部資本, 吉野林業, 木地屋集落

第12章 深町加津枝・奥 敬一 「近畿地方の森林利用に関する比較研究」

近畿地方における自然、社会環境が異なる3つの里山地域(丹後／湖西／木津)を対象に、明治後期以降の森林利用についての比較研究を行い、今日の里山における森林の姿がどのように形成され、変化したかについて述べる。各地域の比較は、文献資料、地形図や空中写真などの地図データ、および聞き取り調査の結果に基づいて行い、里山の地域性とは何か、その実像について具体的に検討するものとする。

【キーワード】 森林利用, 比較研究, 地域性

コラム4 中井精一氏(交渉中) 「*近畿はどこまでも金にまみれた土地である、論」

【キーワード】 _____, _____, _____

終章 大住克博・湯本貴和 「林と里の「賢明な利用」と重層する環境ガバナンス」

【キーワード】 _____, _____, _____

* 各章の初稿を参照した上で、個人的には、歴史を回顧した上で、現在の里山(森林)管理方針、行政の思想に何が足りないか、何が求められるかという話なら、書きやすい。しかし、過去の「林と里」の関係史の総括そのものをきちんと行うということであれば、今後の議論と整理が必要。

全体会議で検討したい事項:

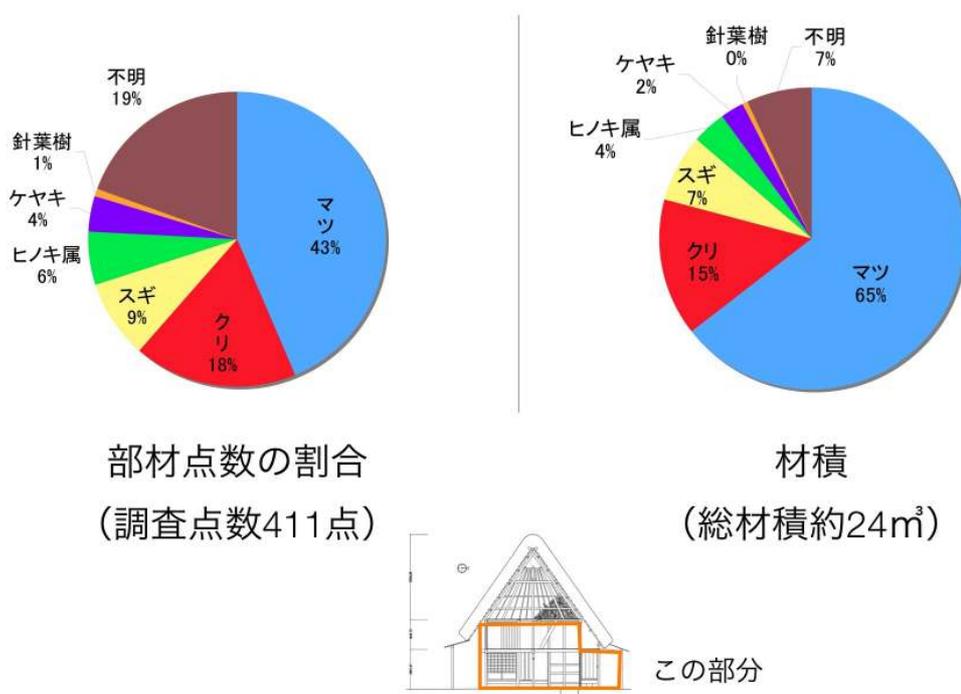
〈誌上報告:近畿班の活動について〉

1. 研究内容と進捗状況

1-1 研究の内容と方法

近畿班では、昨年度の京都府宮津市上世屋での民家解体に引き続き調査検討により多くの成果を得た。里山域における伝統的民家(農家)を解体し、それぞれの部材に、どのようなサイズのどのような樹種が、どう使われているかを調べた。また、木材の調達先、使用意図を、施主、大工など建築関係者から、聞き取りを行った。調査対象とした丹後半島の上世屋集落は、昭和19年に大火にあい、その後伝統的様式で再建されている。そのため、当事者から

建物本体の部材に使われている樹種

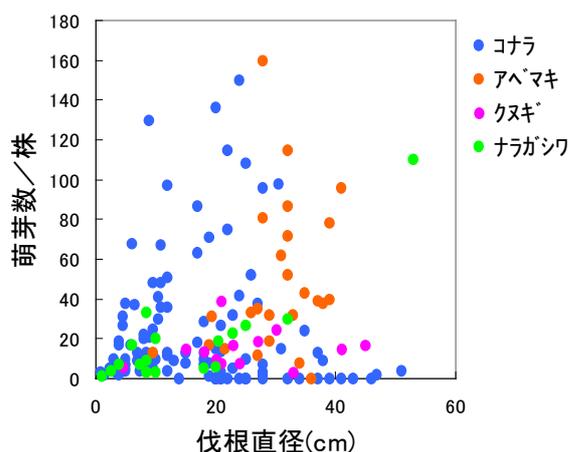


まだ聞き取りが可能であるという点で貴重である。樹種の鑑定作業は京都大学の生存研究所の協力を得た。

建物の本体からは4 1 1点の部材を採取した。多いのはマツ、次いでクリ、スギ、ヒノキ、ケヤキであった。材積では、梁、格天井用として大径材で使用されたマツが2/3を占めた。また、クリは柱材、基礎に多用されていた。一方で、屋根の小屋組みの部材には、うって変わって、細い「雑木」を多用している。2 3 3点採取したが、本数比では、その内クリが4割を占めた。コシアブラ、シデ、コナラ類、マツ、竹、ホオノキなどがこれに続き、使用された樹種は非常に多様であった。

調査対象とした民家に使用された木材の樹種は、集落の近くの里山林の、少し前の時代の種組成に類似する。現在の植生にも類似するが、違いは、現在は病虫害などで減少したクリとアカマツが多いことである。このことから、林床には屋根葺き用の笹が生え、笹を支える屋根の構造材を供給した若い雑木林が広がり、それとともに民家下部の構造材を調達したアカマツ林があり、またケヤキの大径木が混じるといった植生景観が、60年前の上世屋周辺に広がっていたのではないかと推定される。またこの研究成果の一部を、速報として2008年8月に宮津市みやづ歴史の館において地元向けシンポジウムを開催して公表した。

このほか、昭和30年代の大阪を囲む丘陵地・山地の里山薪炭利用の地域ごとの違いについて概況を明らかにしつつある。また、伝統的山林資源管理手法の技術的合理性を検討するために、里山薪炭利用の主たる対象資源であったコナラ亜属各種野、萌芽枝生産の種特性や実生の成長特性に関する情報を蓄積した。さらに、吉野地方の山村民具や萌芽生態の解明についても若干の進展を得ている。



1-2 プロジェクト終了までに期待できる成果

日本は世界第5位の人口密度を持ち、高い水準で木材資源を消費しつつも、先進国中では第3位の森林率を維持している。一見、ワイズユースの結果とも思えるが、ここには様々な利害、多様な動機とともに、生物の種特性が作用していると考えられる。近畿班では植物資源利用の観点からこれらを記述したいと考えている。技術変遷や資源の流通状況の変化を中心として、近畿における植物資源利用の実態を明らかにする。

都市と地域の結びつきの強弱により、立地や流通機構、技術伝搬などさまざまな契機が重なって、さまざまな資源利用形態が現れ、分化・発達した過程を示すとともに、その発達に伴って現れる社会的な構造・制度・新たな課題についても明らかにしたい。

また、持続的・効率的生産技術の典型例としてナラ属を中心とした広葉樹萌芽更新技術を

評価する。

1-3 今年度の研究成果の発信

【論文】

堀内美緒(2008) 滋賀県湖西地域の里山利用の解明に向けた2つのアプローチ, 関西自然保護機構会誌 30:57-59.

伊東宏樹・日野輝明・岩本宏二・島田和則・勝木俊雄(2008) 兵庫県猪名川町の萌芽林および放置林の林床植生,
日本森林学会大会学術講演集 120.

松島洋介・奥敬一・深町加津枝・堀内美緒・森本幸裕(2008) 琵琶湖西岸の里山地域における地元住民と移入住民
の景観認識の比較, ランドスケープ研究 71:741-746.

道盛正樹・佐久間大輔・木村全邦・芦田喜治(2008) 大阪府蘚苔類資料1 大阪城公園の蘚苔類. 大阪市立自然史
博物館研究報告 62:13-20.

森本仙介(2008) 23. 重要有形民俗文化財「吉野林業用具と林産加工用具」の概要. 奈良県立民俗博物館研究紀要
(23), 1-25

小椋 純一(2008) 京都近郊におけるアカマツとコジイの近年の成長について. 京都精華大学紀要 35号:49-67 (印
刷中)

佐久間大輔(2008) 里山環境の歴史性を読み解く. 農業及び園芸 83, (1), 183-189.

【学会等発表】

丸山 健一郎, 佐久間 大輔, 小寺 祐三, 木村 全邦, 菊地 淳一(2008) 本州で初めて確認されたキリノミタケの
産状について. 日本菌学会大会講演要旨集 52:75

村上由美子・光谷拓実・横田洋三・北原 治(2008) 滋賀県畦ノ平遺跡出土材にみる古代の伐採・製材技術 (ポス
ター発表): 日本文化財科学会第25回大会 研究発表要旨集:176-177

小椋 純一(2008) 岡山県北部中国山地における微粒炭分析 (2): 日本第四紀学会 2008年大会:東京大学

小椋 純一: 釧路湿原北東陸地部における微粒炭分析: 日本植生史会第23回大会: パルセイイざか (福島市): 2008
大住克博(2008) 里山林と人: 後は野となれ山となれとはいかぬが定め日本生態学会全国大会 ESJ55 講演要旨
集.

大住 克博, 石井 敦子(2008) 比良山麓里山林におけるコナラ亜属4樹種の結実量の変動. 日本森林学会学術講演
集、119:550

佐久間大輔 (2008) 自然史博物館の役割 地域の自然の情報拠点として: 52回日本菌学会大会講演要旨集.

佐久間大輔 (2008) 堺市菌類レッドリスト作成のための試み: 52回日本菌学会大会講演要旨集.

佐久間大輔, 木村全邦, 道盛正樹 (2008) 樹幹着生蘚苔類に見る西大台ブナ林30年の環境変化. 日本生態学会全
国大会 ESJ54 講演要旨

SAKUMA, D. and ITOH, H. (2007) SATOYAMA woodland vegetation as historical records of
management and commodities production: Woodland Cultures in Time and Space: tales from the
past, messages for the future, Abstracts.

【刊行物】

- 木村全邦・佐久間大輔(2008)大阪府の蘚類－中島徳一郎蘚類コレクション－(附中島コレクション目録CD)．大阪
市立自然史博物館収蔵資料目録 第40集
- 小椋 純一(2008)強烈な人間活動の圧力と森林の衰退，近代化の中での古都の森：「古都の森を守り生かす」(田
中和博編，512pp)：京都大学学術出版会：47-86
- 大住克博(2008)変容する里山林－ナラ枯れの舞台－ ナラ枯れと里山の健康(黒田慶子編)．全国林業改良
普及協会：89-107.
- 佐久間大輔(2008)菌類の機能と生活．菌類のふしぎ-形とはたらきの驚異の多様性(国立科学博物館叢書9) 東
海大学出版会 216p(査読無し)
- 佐久間大輔(2008)昔、堺市に見られたキノコ．NatureStudy. 54(9)7.
- 佐久間大輔(2008)キノコに向き合う 研究というもう一つの楽しみ方の入り口と最先端．INAX BOOKLET『考
えるキノコ－摩訶不思議ワールド－』

【新聞掲載】

シンポジウム「民家が語る里山の価値」開催に関連して2件(京都新聞、朝日新聞)8月24日

【講演等】

- 佐久間大輔(2007)自然史系博物館のデジタル標本データ発信のための課題．ワークショップ21世紀の生物多様
性研究「生物多様性インフォマティクスを創出する2」 主 催：国立遺伝学研究所/東京大学大学院総合
文化研究科/国立科学博物館(国立科学博物)
- 大阪市立自然史博物館第5展示室「生き物のくらし」企画・構成・製作
- 大住克博(2008)里山保全：その問題点と今後の課題．主催：滋賀県森林センター．2008年7月15日．滋賀県森
林センター於．
- 大住克博(2008)里山林の健康を回復させるには－新しい施業技術の提案－．主催：森林総合研究所．2008年10
月28日．京都市リサーチパーク於．
- 奥 敬一(2008)里山の新たな活用と人の関わり方．主催：森林総合研究所．2008年10月28日．於京都市リサーチ
パーク．

【地域での成果報告会】

シンポジウム「民家が語る里山の価値」8月23日、於みやづ歴史の館 文化ホール(宮津市)

2. 今後の活動

2-1 今後の取り組みと具体的な活動内容

民家解体に伴って得た材料の解析はまだ十分に終わっていない。今後、年輪の解析や節の
分布の解析など利用できるパラメータを見出して、当時の森林の生育状況や管理状況の推定

を試みる。さらに、聞き取り調査と組み合わせることにより、維持管理に伴う部材の取り替えや補修の頻度、それに使用される資源量、民家建替のターンオーバー、材の選定や伐採に伴う権利・販売関係、材の搬出方法、集落内の危機管理の仕組み、集落間の互助的關係などを明らかにする。また、当該民家からの情報をもとに、他の民家についても非破壊、または少量のサンプル採取で使用木材の質・量の推定を行うことができるような手法を検討する。

さらに、今年度行ったシンポジウムをベースに、21年度に中間的な報告書を発刊する方針である。

今後とも各研究サイトで、都市と地域の結びつきと里山の植物資源利用の実態についての検討を深めるとともに、地域特性、流通、萌芽利用のインベントリーといった横断的課題について取り組みを深めていきたい。特に大阪・京都を中心とした薪炭流通と萌芽林経営の違いがどのような地域の自然特性の差を生んだのかについては検討と考察を深めていきたい。

さらに、丹後地域以外を含めた研究成果の地域還元の一手法として、研究成果を博物館的な展示として製作する準備を進めていきたい。関連博物館や地域施設での特設展示を行えるような、小規模であっても、地域を考える素材として提供していきたいと考えている。

今年度、里山をめぐる入り会い制度の歴史、流通、技術などをテーマにした連続的な研究会を開催している。21年度も、3巻執筆のための準備とへ移行してこの研究会は続けていく予定である。

2-2 研究遂行上の問題点と解決策

萌芽の素材特性や生理生態、草原からナラ林やカシワ林・クリ林の成立過程、ナラガシワ林の分布など、本研究の進展に伴って副次的な研究課題が多く派生している。これらのどこまでを本課題の成果として追求するかを判断するとともに、次期の研究課題の芽出しとして活用すべきなのか、峻別すべき時期にきている。また、研究開始時の戦力が異動や就職により、分散している現状もある。研究プロジェクトのゴールを見すえ、足りないギャップを埋める活動でプロジェクトの完成をめざすとともに、新戦力の投入のためにも「ゴールの先」を見すえた活動が必要な時期になっていると考えている。近畿班内の共同研究として科研費を申請するなどの努力を行っているが、班を越えた次期プロジェクトの模索も終盤にさしかかり必要となるだろう。

第 4 卷 『海・森・島の環境史』

編集責任: 安溪 遊地 (山口県立大学国際文化学部)・田島 佳也 (神奈川大学経済学部)

巻の趣旨:本巻では北海道と奄美・沖縄における人間—自然相互関係の歴史的・文化的研究の成果を公表する。

日本近世史の研究分野では、松前口と薩摩口(琉球)、対馬口が幕府の公式貿易口、長崎口とともに日本の貿易と「対外」関係を担った「外交」口であったこと、またそれらの4つの口を通じて関係諸国と人的物的交流が行われてきたことが明らかにされてきた。しかも、これまでの研究からは18世紀までの北海道の大部分、蝦夷地は「異域」であり、明確なる日本国の範囲には入っておらず、また琉球王国も薩摩藩に実効支配されてきたとはいえ、明治13年の琉球処分までは「独立」の王国であった。南北に細長い日本国にあって、北端の北海道も、南端の奄美・沖縄もそれぞれ特有の個性を持った自然的地理的条件に規定されて、生業も、その地に暮らす人びとの実態や意識、歴史も大きく異なり、さらにはいわゆる「内地」の人びともそれらはかなり異なっていた。

しかし、それらの条件の違いは人間を含めた生物の多様性が日本の中に存在することを物語るものであり、本巻ではあえて北と南の地域をまとめて1巻とすることで、それを明白な形で提供することを意図した。取り上げた課題によっては北海道と奄美・沖縄の両者に通底するものもあるかも知れない。そうした点では他の巻とは異色である。

なお、編集にあたってはオーソドックスにⅡ編にわけてⅠ編を北海道班、Ⅱ編を奄美・沖縄班とした(逆でも可)。それは北海道と奄美・沖縄の項目を混合させて編集するよりも、本書の読者が読後に地域の特徴を少しでもイメージでき、その地域で暮らしてきた人びとが抱え、直面し、解決に努力してきた(努力して来なかった)問題点、人間—自然相互関係の歴史的・文化的課題と解決努力の軌跡を知るには、こうした編集のあり方のほうがよいと思われたからである。(以上、田島原案。奄美・沖縄班としては、他の巻との構成に齟齬がなければ、了承。)

目次: (タイトル) (執筆者)

序章「海と森と島の環境史年表——北海道と沖縄の関係」

第1編 北海道における人間—自然相互関係の歴史的・文化的課題

第1章 「北方域でのエゾアワビの利用と古環境」	右代啓視
コラム1「噴火湾のオットセイ猟」	小杉 康
第2章 「北の水産資源・森林資源の利用と認識」	田島佳也
第3章 「北海道の開拓と森林伐採」	三浦泰之

第4章 「北海道で魚をふやす二つの方法－人工孵化と魚付林－」	麓 慎一
第5章 「スケトウダラ漁に生きる漁師達の知恵と工夫－積丹半島以南の比較を通して－」	中野 泰
第6章 「北海道に里山は存在したのか －北海道における後氷期の海浜型集落立地の出現と展開－」	小杉 康
第7章 「自然と一体で生きるということ」	児島恭子
第2編 奄美・沖縄における人間－自然相互関係の歴史的・文化的課題	
第1章 「古代のヤコウガイ捕獲史」	木下尚子
第2章 「ジュゴンの乱獲と絶滅の歴史」	当山昌直
第3章 「明治大正期の奄美沖縄の統計書を読む」	早石周平
コラム 1「ソテツのたどった道」	安溪貴子
第4章 「サンゴ礁の環境認識と資源利用」	渡久地 健
コラム 2「西表島のイノシシ獺にみる陸産資源の持続的利用」	蛸原一平
第5章 「物々交換が結ぶ島々」	安溪遊地
コラム 3 盛口 満「沖縄に里山はあるの？」	
終章 「『賢明な利用』と環境ガバナンス——北海道と奄美沖縄の対比から」	安溪遊地

〈各章のキーワードと概要〉

序章 「海と森と島の環境史年表－北海道と沖縄の関係」
【キーワード】環境史年表

第1編 北海道における人間－自然相互関係の歴史的・文化的課題

第1章 右代啓視 「北方域でのエゾアワビの利用と古環境」

北方の先史時代（縄文～中世まで）の人たちは、海洋資源をどのように利用してきたか貝塚から出土する貝遺骸の検討を基に過去の環境変化を復元し、海洋資源の賢明な利用はあったのかどうかを明らかにする。特に、北方域でのエゾアワビの出現はいつか？その漁あるいは漁期はどうであったか？その加工に使う燃料としての森林資源の利用まで展開できれば良いと思っている。

【キーワード】先史時代，古環境，エゾアワビ

コラム1 小杉 康 「噴火湾のオットセイ獺」

【キーワード】美々4遺跡，小幌洞窟遺跡，海獣狩猟

第2章 田島佳也「北の水産資源・森林資源の利用と認識」

近世後期から近代までに、漁業経営者も含めた漁民たちが生業優先に鯿をはじめとする水産物を獲り、その加工のためにいかに近隣村の山々から薪炭などの森林資源を濫伐し、利用してきたかを跡付け、水産資源・森林資源に向き合う北海道西海岸の漁民たちの利用と姿勢の実態を明らかにする。その際、可能な限り数量的把握によって、実態に迫りたい。

加えて、水産資源・森林資源の利用に関して当時の施政者がどのような漁業政策、森林利用政策で臨んでいたかも、実態として明らかにできれば、と考えている。

【キーワード】 水産資源, 森林資源, 資源認識

第3章 三浦泰之「北海道の開拓と森林伐採」

明治30年頃に北海道庁殖民部が作成した『北海道殖民状況報文 後志国』を主な史料として、明治30年代前後の後志地方における、①森林の状況、②生業と森林の関わり、③薪炭・材木の流通状況、について具体的に記述する。あわせて、当該期の北海道庁当局の森林に対する認識も探る。

全体としては、北海道庁当局にとっては北海道「開拓」の進展が、開拓民や漁業者にとっては生業の確保が、森林保護よりも優先されていたという状況の一端を具体的に明らかに出来ればと考えている。

【キーワード】 北海道開拓, 森林伐採, 木材利用

第4章 麓 慎一「北海道で魚をふやす二つの方法－人工孵化と魚付林－」

- ① 人工孵化の導入を種川制度や伊藤一隆の動向を含めて説明
- ② 魚付林の北海道での試み
- ③ 森林法による魚付林の設定

【キーワード】 人工孵化, 種川, 魚付林

第5章 中野 泰「スケトウダラ漁に生きる漁師達の知恵と工夫

－積丹半島南部の比較を通して－

北海道西南漁村における漁場利用を対象に、資源減少に対する漁業組織の地域ごとの対応を取り上げ、「資源管理」という思想や技術が、いかに漁民の生活レベルから形成され、禁漁区の設定などの工夫に至るのかを明らかにする。個人の行為レベル(日誌資料の検討)も視野に入れ、資源に対する共同体規制の表裏を把握しながら、船霊祭祀の実践やその変容を捉える。地域社会における漁業者の資源観を通じて、賢明な利用がいかなる性格を持つのかを議論する。

【キーワード】 水産資源, 共同体規制, 賢明な利用

第6章 小杉 康 「北海道に里山は存在したのか」

—北海道における後氷期の海浜型集落立地の出現と展開—

【キーワード】 後氷期, 海浜型集落, 里山, 人類遺跡

明治期になって法制度として、あるいは行政的に、北海道に魚付林が導入された背景は何か。このような、きわめて「歴史的な出来事」を、アフリカを旅だった人類が、寒冷地適応と海浜適応を遂げながら、やがて日本列島にたどり着き、住み付いてから今日にいたるまでの、北海道における人類遺跡の立地の変遷過程を通して問い直してみる。「里山」とは何で、そして北海道にも里山は存在したのかを考える。

第7章 児島恭子 「自然と一体で生きるということ」

アイヌ文化の思想が人間を自然と対置しないことは先住民族の自然観として一般的に知られている。アイヌのそのようないわゆる伝統的な環境思想、環境知識の根底にあるのは、人間の持続可能な生存（子孫を永続させる）という目的と、それを直接的に不可能にする食糧の枯渇への恐怖である。さまざまな伝承からそれらを明らかにし、北海道における人間と自然の史的相互関係の一角として位置づける。

【キーワード】 アイヌ, 伝統的知識, 伝承

第Ⅱ編 奄美・沖縄における人間—自然相互関係の歴史的・文化的課題

第1章 木下尚子 「古代のヤコウガイ捕獲史」

先史時代の琉球列島におけるヤコウガイ捕獲の状況を示し、7～9世紀の乱獲の意味を考察する。

【キーワード】 ヤコウガイ, 琉球列島, 大きさ復元, 先史時代, 乱獲

第2章 当山昌直 「ジュゴンの乱獲と絶滅の歴史」

先史時代、ジュゴンは琉球各地にいた。遺跡からのみ見つかったジュゴンの骨はそれを物語る。近世、ジュゴンは歌謡や伝承等に登場し、人々からは畏敬の念でみられていた。そして、八重山から租税としてジュゴンの肉（皮）が首里王府へ納められていて、新城島だけにその捕獲が認められていた。近代、王府の滅亡により、これまでのシステムが崩れ、八重山では乱獲が始った。そして、八重山からジュゴンが消えた。本稿では、これらの過程を資料等で示しながら、資源利用について考える。

—節立て—

- 1 琉球における先史時代のジュゴン
- 2 近世史料にみるジュゴン
- 3 近世統一資料にみるジュゴン
- 4 八重山のジュゴン

5 永続的利用－過去から学べること－

【キーワード】 ジュゴン, 八重山, 近代統計資料

第3章 早石周平 「明治大正期の奄美沖繩の統計書を読む」

南西諸島には高い島と低い島がある。島の限られた土地に占める平地、原野、山地の割合は島ごとに異なり、土地利用様式がそれぞれに特徴を持った変遷をしてきたようだ。明治大正期の統計書から、この変遷を概観してみる。

【キーワード】 甘蔗転作, 土地利用, 明治大正期

第4章 渡久地 健 「サンゴ礁の環境認識と資源利用」

サンゴ礁環境はいま世界的に危機に瀕している。それは、グローバルな環境問題（生物多様性喪失の危機など）であるとともに、地域的な沿岸資源枯渇という危機でもある。本章は、サンゴ礁を、島を取り巻く海洋資源（コモンズ）と捉え、地先のサンゴ礁の海で漁撈を営む人々が何世代にもわたって培ってきた、サンゴ礁の自然（地形、水族など）に関する知識、資源を捕獲する技術（漁法など）を、聞き書きによって記述し、そのサンゴ礁に関する知識と技術それが持つ/持たない永続可能な資源利用の可能性/問題点について、近現代という時代に限定して考える。

－節立て－

- 1 サンゴ礁の危機
- 2 奄美・沖繩の近代のサンゴ礁利用と資源略奪（略史）
- 3 海人たちが語るサンゴ礁の地形、水族、漁撈、資源危機意識
- 4 地域沿岸資源の減少
- 5 永続的利用－過去から学べること、未来に向けて為すべきこと

【キーワード】 サンゴ礁地形, 水族, 漁撈, 民俗知識・技術, 永続的利用

第5章 安溪遊地 「物々交換が結ぶ島々」

黒潮洗う琉球弧の島々は、古くから隣り合う島をつなぐ交易と交流のネットワークでつながれてきた。15世紀後半の朝鮮濟州島民の見聞録は、このころすでに、これらの島々を結ぶ交通ネットワークがあったことを示している。隣り合う島々を結ぶ物々交換を主体とする交易活動は、立地の違いという生態的な背景に基づいて連綿と行われ、政治的な理由でそれが妨げられた場合を除いて、ほとんどの地域で明治時代まで、場合によっては戦後まで続いたのであった。

－節立て－

- 1 濟州島民の漂流記に見る15世紀の琉球弧
- 2 手を結ぶ島々・対立する島々

- 3 隣り合う島々の物々交換の例
- 4 大きな空白地帯・奄美
- 5 与路島で考える琉球弧の未来

【キーワード】 物々交換, 高い島と低い島, 濟州島民の漂流記, 貨幣, 収奪

コラム1 安溪 貴子 「ソテツのたどった道」

沖縄では「ソテツ地獄」というが、奄美の島々では、ソテツは主食の位置をしめていた。有毒な作物と、それを毒抜きして利用する技術は、どのように島々を伝播したのだろうか。いろいろな手がかりから、そのルート的一端をさぐってみたい。

【キーワード】 ソテツ, 伝承, 毒抜きの技術

コラム2 蛭原一平 「西表島のイノシシ獺にみる陸産資源の持続的利用」

琉球列島においてイノシシは唯一の狩猟対象獣である。これまで保護の対象となることはなく、有史来利用されてきた。西表島の狩猟の歴史と現在の狩猟活動から持続的狩猟の背景を探り、「賢明な利用」について考える。

【キーワード】 持続的利用, 狩猟技術, 生態的要因

コラム3 盛口 満 「沖縄に里山はあるの？」

沖縄の人里環境の自然は戦争と本土復帰を機に大きく変化した。現代の沖縄のこどもたちに聞くと、身近な自然は「ゴキブリに犬に草」という様相を示す。忘れ去られつつあるかつての人里の自然を聞き取りによって明らかにする。聞き取りから見えてきたのは、シマごとに固有の自然利用だった。

【キーワード】 里山, 田んぼ, 緑肥

終章 安溪遊地 「『賢明な利用』と環境ガバナンス——北海道と奄美沖縄の対比から」

論文とコラムの全体を読ませていただいて、北海道と奄美・沖縄でおこったできごとを南北の端からとらえかえす視点でまとめてみたい。

【キーワード】 賢明な利用, 環境ガバナンス, 文化的ジェノサイド

全体会議で検討したい事項:

(田島・児島 12/1)

●北海道班と奄美・沖縄班ではかなり地域の捉え方が異なる。だとしたら、どのような特色ある本が出せるか、であろう。そう考えた結果、テーマに沿って章立てし、それに北海道と奄美・沖縄の事例を掲げるのではなく、本プロジェクトの主旨から、地域像を浮かび上がら

せる体裁がやはり良いのではないか、と思うに到った。それでよいかどうか。

●序章の「海と森と島の環境史年表——北海道と沖縄の関係」については、環境史年表がどういうものになるかまだつかめない状態だが、環境史年表と序章の文章との関連性もよくわからない。

●書く分量をはやく知りたい。それによって内容や書き方が変わってくる。

(安溪 12/1)

●11月に入って、北海道班から目次案が示されました。奄美・沖縄班としての対応を考える時間が不足しているので、全員に情報をながしつつ、班長の責任で安溪が対応しました。

●まず、児島先生が中心になって編成された4部構成案とそれにそった北海道班の章立てがしめされました。

序章

第Ⅰ部 価値あるものの濫獲・絶滅への道

第Ⅱ部 政治・経済が自然に与えた圧力

第Ⅲ部 持続可能な利用の模索

第Ⅳ部 人間と自然のかかわりについて考える

終章

というものです。そこで、石丸さんが、ここに奄美沖縄班をはめこむ作業をしていただいた結果、コラムが2つある章があったりするアンバランスがでてきましたので、安溪が、奄美・沖縄班の4つの章と4つのコラムという構成を、早石さんの統計書の研究を、論文に格上げして、5つの論文と3つのコラムとして、はめこみ、一つの部が3つの章とひとつのコラムからなるように構成してみました。田島先生のコラム「俵物と諸物」は、どうしてもはみ出すので、この内容を序論にもりこんでいただければ、と進言しました。ただ、第Ⅳ部については、もう少し手垢のついていない表現がありうるとは思うと述べました。また、序章と終章について、田島氏と安溪の間の情報交換が不足であるが、それぞれ分担して書くことにすればどうか(環境史に関する資料はもちろん提供させていただく)と提案しました。

その後、やはり班別にわけたい、という上記のような再提案がなされました。これについては、奄美・沖縄班ではまったく意見をもとめておりませでしたので、念のために、経過案としての、奄美・沖縄班からの目次案の提案を以下にうつしておきます。

序章 執筆者未定

「海と森と島の環境史年表——北海道と沖縄の関係」

第Ⅰ部 価値あるものの濫獲・絶滅への道

第1章 木下尚子「古代のヤコウガイ捕獲史」

第2章 右代啓視「北方域でのエゾアワビの利用と古環境」

第3章 当山昌直「ジュゴンの乱獲と絶滅の歴史」

コラム1 小杉 康「噴火湾のオットセイ猟」

第Ⅱ部 政治・経済が自然に与えた圧力

第4章 田島佳也「北の水産資源・森林資源の利用と認識」

第5章 三浦泰之「北海道の開拓と森林伐採」

第6章 早石周平「明治大正期の奄美沖繩の統計書を読む」

コラム2 安溪貴子「ソテツのたどった道」

第Ⅲ部 持続可能な利用の模索

第7章 麓 慎一「北海道で魚をふやす二つの方法－人工孵化と魚付林－」

第8章 中野泰「スケトウダラ漁に生きる漁師達の知恵と工夫－積丹半島以南の比較を通して－」

第9章 渡久地 健「サンゴ礁の環境認識と資源利用」

コラム3 蛭原一平「西表島のイノシシ猟にみる陸産資源の持続的利用」

第Ⅳ部 人間と自然のかかわりについて考える

第10章 小杉康「北海道に里山は存在したのか－北海道における後氷期の海浜型集落立地の出現と展開－」

第11章 児島恭子「自然と一体で生きるとのこと」

第12章 安溪遊地「物々交換が結ぶ島々」

コラム4 盛口 満「沖繩に里山はあるの？」

終章 安溪遊地「『賢明な利用』と環境ガバナンス——北海道と奄美沖繩の対比から」

いずれにしても、ひとつひとつの論文やコラムの内容について、どうこういう立場にはありません。いかに編集して、魅力的なものをくみあげるか、という編集方針の問題であり、全体の6巻構成の中でしめされる方針に従います。班別にするか、内容でまとめていくかどうかは、まだ確定できず、ようやく中身に基づいた話し合いができる段階にきたものと考えています。コラムと論文を一度すべてシャッフルして、下からくみ上げてみる、という作業は、序論と終章を血の通ったものにするためには、必須のプロセスだと、いずれにしても考えています。

全体のページ数や、論文・コラムの標準的枚数が提示されていない現状では、確定的なこととは言えないのですが、全員が論文を書くという北海道班の方式では、他の巻にくらべて、やや分量が超過するのではないか、と患ったりしています。

序章については、執筆の担当あるいは分担が確定していません。

〈誌上報告:北海道班の活動について〉

1. 研究内容と進捗状況

1-1 研究の内容と方法

1-2 プロジェクト終了までに期待できる成果

研究史的にも、これまでの研究では漁業は漁業、林業は林業というように部門史のなかでの課題追究に止まっていた懸念が濃厚であった。しかし、本研究によって、それぞれの産業が孤立的に展開したのではなく、濃密な有機的関連によって展開したことが、予想したこととはいえ、明らかになりつつある。しかも、それが人為的（非「賢明な利用」の貫徹）である点、自然的歴史的北海道の位置づけから浮き彫りにされつつある。

1-3 今年度の研究成果の発信

【成果報告会】

2008年10月18日「フォーラム 海・森・人－北海道の文化としての資源を考える－」

地球研日本列島プロジェクト・北海道開拓記念館共催事業、北海道開拓記念館(札幌市)

主旨説明 湯本貴和・田島佳也

研究報告1 中野 泰「スケトウダラ漁業における「漁場管理」の形成」

研究報告2 麓 慎一「北海道における水産事業の展開と保護政策」

研究報告3 三浦泰之「明治期北海道における森林の状況と木材の利用」

研究報告4 田島佳也「鱈漁業と森」

討 論

【刊行物】

小杉 康 2008年6月「人類遺跡」『図録 2008年G8洞爺湖サミット関連北海道大学総合博物館企画展示 洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源』、北海道大学総合博物館、pp. 8-9

小杉 康 2008年6月「有珠山と後氷期の人類活動」『北海道大学サステナビリティ・ウィーク 2008 洞爺湖環境フォーラム』、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター、pp. 6-7.

中野 泰(2008)「水産資源をめぐる平等と葛藤」、山泰幸・川田牧人・古川彰編『環境民俗学－新しいフィールド学へー』、昭和堂、pp. 136-160。

【講演等】

小杉 康 2008年7月19日「有珠山と後氷期の人類活動」、(北海道大学総合博物館「土曜市民セミナー」)、北海道大学総合博物館

小杉 康 2008年6月14日「有珠山と後氷期の人類活動」、(北海道大学サステナビリティ・ウィーク 2008「洞爺湖環境フォーラム」)、洞爺総合センター

地球研プロジェクト「日本列島における人間－自然相互関係の歴史的・文化的検討」(列島プロ)

小杉 康 2008年11月13日 『『ローカル・コモンズ』としての縄文エコ・ミュージアム－有珠6遺跡から小幌洞窟遺跡にいたる小径－』、(洞爺湖有珠山ジオパーク「世界ジオパークネットワーク申請選定記念フォーラム」)、洞爺湖周辺地域エコミュージアム推進協議会主催、豊浦町地域交流センター「とわにー」(豊浦町)

右代啓視 2008年「過去の気候変動と北方文化」、児島恭子「人間・自然の関係と“気候変動”」(第23回北方圏国際シンポジウム分科会第14回氷海の民シンポジウム「先史時代の気候変動と人間の関わり」)、紋別市文化会館(紋別市)

田島佳也 2008年6月「近世における煎海鼠の流通と中国輸出について－とくに北海道産を中心に」韓国MBCテレビ放映番組のインタビュアーとして解説。

田島佳也 2008年9月27日 国立民族博物館・研究フォーラム『『夷酋列像』と道東アイヌ』(佐々木史郎、大塚和義代表)の研究発表者・川上淳「クナシリ・メナシの戦いの評価」のコメンテーター(会場；道立北方四島交流センター)

2. 今後の活動

2-1 今後の取り組みと具体的な活動内容

プロジェクト参加研究者の追究課題がほぼ固定化されてきたことを踏まえて、研究の深化を図り、本プロジェクトの主旨に則って「賢明な利用」の検証を今後も継続し、まとめて行く。

2-2 研究遂行上の問題点と解決策

〈誌上報告:奄美・沖縄班の活動について〉

1. 研究内容と進捗状況

1-1 研究の内容と方法

年度途中から、三輪大介氏（兵庫県立大学大学院博士課程に社会人入学）にメンバーとして加わっていただいた。沖縄経験が長く、専門は、環境ガバナンスからみた蔡温の政策の研究。

1-2 プロジェクト終了までに期待できる成果

三輪大介氏がくわわったことにより、これまで手薄であった近世の沖縄と環境ガバナンスについての研究の厚みが増すものと期待される。

1-3 今年度の研究成果の発信

【刊行物】

- 安溪貴子・安溪遊地（2008）「日本最南端のお寺で——竹富島の上勢頭同子さんのお話」『生命の島』81号
- 安溪遊地・安溪貴子（2008）「ヤマネコは神の使い——西表安心米の挑戦」『生命の島』82号
- 安溪遊地・安溪貴子（印刷中）「足もとから平和をつくる——屋久島でいただいたご縁を生かして」『生命の島』84号
- Hayaishi S, Shibata F, Kawamichi T (2008) Uniparental care and activity of nursing females of *Apodemus argenteus* during the lactation period on Mt. Asama, Central Japan. *Mammal Study* 33: 111-114.
- 宮本常一・安溪遊地（2008）『調査されるという迷惑—フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版
- 盛口 満（2008）『フライドチキンの恐竜学』サイエンス・アイ新書、ソフトバンク・クリエイティブ、214pp
- 盛口 満（2008）『コケの謎』どうぶつ社、214pp
- 盛口 満（2008）『森を育てる生きものたち—雑木林の絵本』共著（作画担当）、岩崎書店、32pp
- 盛口 満（2008）『ぼくのコレクション』福音館書店刊の韓国語版、114pp
- 盛口 満（2008）「ゴキブリの歴史」『てら子屋』10巻、ヒューマンルネッサンス研究所、18-21pp
- 木下尚子（印刷中）「正倉院伝来の貝製品と貝殻—ヤコウガイを中心に—」『正倉院紀要』第31号

【学会・シンポジウム】

- 安溪遊地、2008年11月1日、「済州島民が見た15世紀の沖縄——生活文化と民衆の記憶の持続性をめぐって」『第3回韓国沖縄・琉球研究会』（ソウル大学校社会科学大学人類学科主催）
- 安溪遊地、2008年11月2日、「コメント・西表島での葬礼と聖なる植物ダンチクについて」『第8回国際珍島学会』（韓国珍島・ソポ村）

【講演等】

- 安溪貴子、2008年8月2日「西表島の土地利用と食生活」『国際マングローブ生態系協会主催 JICA 研修生への

地球研プロジェクト「日本列島における人間－自然相互関係の歴史的・文化的検討」(列島プロ)

講義』(浦添市)

安溪遊地、2008年8月2日「何のための保全・誰のための援助なのか」『国際マングローブ生態系協会主催 J I

C A 研修生への講義』(浦添市)

安溪遊地・安溪貴子、2008年11月3日「民衆の記憶力——沖縄・八重山における異文化の交流史をめぐって」全南大学校人類学科(韓国光州市)で特別講義

木下尚子、2008年10月4日「ヤコウガイ交易と沖縄-7~13世紀を中心に-」『沖縄県埋蔵文化財センター 第31回文化講座』

【新聞掲載】

安溪遊地「人間は考えるボーダーである——ダンチクの不思議な力を追って」『南海日々新聞』2008年9月12日号

盛口 満「生き物、骨まで大好き」、北海道新聞夕刊、2008/10/7

盛口 満「沖縄おもしろ博物学」、沖縄タイムス、毎週連載

2. 今後の活動

2-1 今後の取り組みと具体的な活動内容

2009年2月に沖縄島北部で行われる、地球研・琉球大学観光産業学部合同シンポジウムにおいて、奄美・沖縄班は、空中写真や昔の生活のパネル展示、コーディネートなどで全面的に協力することになっている。調査による昔の生活の聞き書きを会場で配布できるブックレットとして印刷するための準備をしている(現在、A4サイズで180頁程度原稿がある)。

来年度は、合同調査および個別調査をおこなうとともに、奄美大島において、奄美・沖縄班としての研究発表会を開催するべく早めに準備したい。

書籍(6冊本)のうち、北海道班との合同で一冊を編むことになっている。

2-2 研究遂行上の問題点と解決策

全体として、班員の個別の調査研究は、それぞれの進捗で進行中である。合同の合宿調査の結果も、聞き取り集などの形で世にだせると思われる。

メンバー中の高齢者はみな「超」のつく多忙の中にあり、若手は査読付き論文および博士論文執筆の圧力の中にある。中堅といえる方は非常に少なく、「ひとりも過労死しないこと」をめざしてなんとか生き延びることを考えることだけがわずかな解決策かと思われる。

第 5 卷 『山と森の環境史』

編集責任: 池谷 和信 (国立民族学博物館)、 白水 智 (中央学院大学)

巻の趣旨: 日本列島における山や森と人間活動とのかかわりを広く見渡すと、近世から現在までの、とりわけ東北地方から中部地方にかけての山村に、その顕著な実像をうかがうことができる。近世や近代では、都市近郊にはすでに大径木が生産できる天然林はなく、かなり遠隔地の山村に木材生産の場を確保しなければならなかった。またそのような山村では、毛皮や肉、薬種などのために捕獲される大型哺乳類や、鷹狩りに使用するハイタカやツミなどの鳥類のほか、食料となる山菜・茸類、衣類その他の生活資材となる植物なども重要な生物資源であった。これら奥山に位置する山村での多様な資源利用においては、人間と動植物の間だけでなく、人間同士の間にも葛藤が生じ、利害の調整が歴史を通じて大きな課題になっていた。

この巻では、都市近郊の水田に関連した里山ではなく、焼畑耕作とともに、材木生産、木地製作、狩猟、採集などの生業技術体系を複合させて人々の生活が成立していた中部や東北の奥山の山村を中心に、資源利用をめぐる人と森林、人と人とのかかわりの歴史と現在を論じる。

目次:	(タイトル)	(執筆者)
序章	〈山と森〉の環境史年表	池谷和信・白水 智
第Ⅰ部	山地の自然史	
第1章	山村の地形形成と土地利用	長谷川裕彦
第2章	生物多様性と人間の森林利用	辻野 亮
第3章	生物多様性と人間の動物利用	三戸幸久
第Ⅱ部	藩政期における多様な山地利用と社会制度	
第4章	仙台藩の獵師鉄砲とその狩獵庄	村上一馬
第5章	巢鷹をめぐる信越国境地域の山地利用と規制	荒垣恒明
第6章	盛岡藩における馬の放牧と獣害	菊池勇夫
第7章	マタギ文書と信仰について	永松 敦
第8章	近世山村における生業・生活の変遷と資源利用	白水 智
第Ⅲ部	明治以降における山地の自然資源利用の変遷	
第9章	東北・中部における獣獵のありかたの比較と変遷	田口洋美
第10章	木材資源利用からみた森林環境の変化とシカ	小山泰弘
第11章	林野利用の編成と山村生活	関戸明子
第12章	木工品製作の変遷と山地資源	井上卓哉

第13章	近代山村における多様な資源利用とその変化	岡 恵介
第IV部	現在の森林環境と人間	
第14章	人間活動からみた植物と人間とのかかわり	井上卓哉・池谷和信・岡恵介
第15章	サルの眼からみた動物と人間とのかかわり	伊澤紘生
第16章	現代山村における資源利用と獣害	池谷和信
コラム1	北に進むイノシシとその害	西崎伸子
コラム2	信越国境秋山地域の生活と山	吉村郊子
終章	山と森の「賢明な利用」と重層する環境ガバナンス	白水 智・池谷和信

〈各章のキーワードと概要〉

序章

第I部 山地の自然史

第1章 長谷川裕彦「山村の地形形成と土地利用」

東北日本の日本海側に位置する多雪中級山岳の地形的特徴は、第三紀層および第四紀火山岩類の分布と重複して地すべり地形が広範に形成され、急斜面に雪崩地形（アバランチシュート・筋状地形）が発達することである。長野・新潟県境を流下する中津川流域には、多雪中級山岳に認められる典型的な地形が分布する。ここでは、中津川流域の地形発達史を示し、地形と土地利用との関係について論じる。

【キーワード】 多雪中級山岳・地すべり地形・河成段丘

第2章 辻野 亮「生物多様性と人間の森林利用」

人間社会は森林資源利用を通して森林生態系とその生物多様性に大きな影響を持っている。たとえば長野県北部秋山地域のさまざまな森林における植物種多様性を比較したところ、植林地での植物種数は天然林や広葉樹攪乱林でのそれとそれほど変わらなかった。むしろ人間によって食用として利用されている食用植物の種数は広葉樹攪乱林や植林地、集落近辺で多く、森林利用のすべてが必ずしも生物多様性を損なうわけではない可能性が示される。

【キーワード】 冷温帯落葉樹林・森林利用タイプ・植物種多様性

第3章 三戸幸久「生物多様性と人間の動物利用」

人間社会は動物資源利用を通して森林での生物多様性に大きな影響を持っている。たとえば、東北地方のニホンザルの分布変遷には人間活動が大きく関与している。ここでは、東北地方北部のニホンザルの分布変遷、岩手県を中心にした大正時代および昭和20年代の分布地変遷と植生の変化との関係、狩猟圧による地域的絶滅とその社

会的背景を明らかにし、その獲り尽くしの心理と経過を考える。また、戦後の経済発展による獣需要低下と狩猟依存度の低下、およびニホンザルの分布域拡大への転進、70年代以降の分布域拡大と猿害の多発とその駆除事情についても言及する。

【キーワード】 ニホンザル・人間活動・絶滅

第Ⅱ部 藩政期における多様な山地利用と規制

第4章 村上一馬「仙台藩の猟師鉄砲とその狩猟圧」

近世の仙台藩には、3千人を超える「山立猟師」と呼ばれた百姓が猟師鉄砲を所持していた。彼らは、毎年、鉄砲改証文の提出を義務づけられ、そこでは、他村にて勝手に狩猟をしないことを誓約させられていた。猟師の数は村によって大きく異なり、したがって、村ごとに鉄砲による狩猟圧も異なっていたことが想定される。さらに藩境を超えた盛岡藩や秋田藩では、鉄砲の所持を許される猟師数が仙台藩よりも格段に少なかった。このように、村や藩の領域によって野生動物に対する狩猟圧が異なっていたことを考証する。

【キーワード】 猟師・狩猟圧・藩政

第5章 荒垣恒明「巢鷹をめぐる信越国境地域の山地利用と規制」

長野県北部秋山地域の山間部は、13世紀から鷹狩用の巢鷹（鷹の雛）を産出する巢鷹山として知られ、18・9世紀までその存在が確認できる。時の権力者に巢鷹を供給する巢鷹山では、森林資源利用に様々な規制が設けられる。この巢鷹山をめぐる「使わせない」という動きについて、主に17～19世紀の史料を対象としながら、そうした規制を支えたロジックの中味、周辺住人にとっての意味、山地利用に及ぼした実際の影響等の諸点を解明し、前近代社会における人と自然の関係の具体相を示してみたい。

【キーワード】 巢守・巢鷹山相論・信越国境

第6章 菊池勇夫「盛岡藩における馬の放牧と獣害」

盛岡藩は駒二歳の御用馬を確保するため直営の藩牧を持っていた。藩牧で飼養される馬を民間の里馬と区別して御野馬と呼び、年間を通して牧野に放し飼いにし、あるいは雪害や狼害を避けるため冬期のみ近隣の農家に預ける舎飼も行われていた。岩手県北部の北野・三崎野の両牧を中心に、毎年繰り返される1年間の藩牧の維持・管理システムを明らかにしながら、それを困難にさせる要因として狼害に着目し、その対策について述べる。

【キーワード】 藩牧・馬・狼害

第7章 永松 敦「マタギ文書と信仰について」

狩猟文書を全国的視野で見た場合、東北マタギ文書は巻物が多いことに気づく。九州の場合は草子本が多いのだが、なぜ、マタギの人々が巻物を好むのかについて、従来あまり考察されてこなかった。書誌学的に見た場合、マタギ文書が携行されるものであること、宗教的に権威づけとして見られることなどを注目し、文書からマタギが全国の猟師のなかで特殊であるという位置づけができないかと考えてみたい。また、マタギ文書の常套句である産忌・死忌についても検討する。

【キーワード】 マタギ・巻物・狩猟文書

第8章 白水 智「近世山村における生業・生活の変遷と資源利用」

前近代の山村生活として措定される生活・生業の様式は、往々にして固定的・ステレオタイプ的なイメージで捉えられがちである。しかし歴史的視点で見ると、例えば近世の中にあっても集落規模や生業・生活の様式はかなりの変化を見せている。論文では、信越国境秋山を対象として具体的にその変化を辿り、現地の人々が資源枯渇をはじめとする自然環境の問題とどのように向き合ってきたかを考えていきたい。

【キーワード】 近世山村・生業・秋山

第Ⅲ部 明治以降における山地の自然資源利用の変遷

第9章 田口洋美「東北・中部地域における獣猟のありかたの比較と変遷」

東北地方の山間集落に現在でも伝承されているオソ・ヒラ・オトシ・シャー・オオモノビラなどと呼ばれるツキノワグマやニホンカモシカなどの大型獣を捕獲目的とした吊り天井式重力罠がある。これらの罠は、敷設目的と敷設時期、さらに構造的相似性を有している。本稿では、東北各地に伝承されている大型獣用罠の復元を通して現在まで明らかとなってきた技術の地域性と普遍性を中心に論じる。

【キーワード】 罠・狩猟技術・技術波及・地域適応進化・市場志向型生業

第10章 小山泰弘「増え続けるニホンジカの背景にある森林の変化

～木材資源利用から考える～

木材資源は、山村地域の重要な資源として積極的に使われ、財産として管理されてきたことから、未利用地が発生すると資源確保の目的で造林を行い資源の拡大に努めてきた。しかし、燃料革命などの影響で森林の資源価値が低下したために利用されなくなり、森林が遷移することで成熟していった。森林環境の変化によって、ニホンジカなどの野生獣類が増加しやすい環境となり、野生獣類と人の軋轢も増加してきている。

【キーワード】 造林・森林遷移・ニホンジカ

第11章 関戸明子「林野利用の変遷と山村生活」

信州秋山郷を事例とし、明治期以降の林野利用の変遷を空間的に捉え、自然条件や土地所有との関係を考察する。広大な面積を占めていた部落有林野の利用実態をできるかぎり明らかにし、造林への転換過程を検討する。そして、山村に暮らす人びとの生活が林野とどのように結びつき、それがどのように変化したのかを、発電所の建設、スーパー林道の開通、観光地化などの大きなイベントと関連づけながら、地域変貌の様相を跡づける。

【キーワード】 林野利用・入会林野・山村の生活様式

第12章 井上卓哉「木工品製作の変遷と山地資源」

山地を舞台に古くから行われてきた資源利用形態の一つに、樹木を伐採・加工し、商品として流通する様々な木工品を作るという活動がある。そして、その活動は、社会や自然環境などの変化の影響を受け、その時々によって姿を変えてきた。

本章では、信越国境の秋山地域における木鉢や木鋤製作などの事例から、近代以降における、木工品製作の変化の過程とともに、その変化の中で山地資源がどのように利用されてきたのかについて明らかにする。

【キーワード】 木鉢・木鋤・流通

第13章 岡 恵介「近代山村における多様な資源利用とその変化」

明治9～18年にかけて岩手全県で編纂された、「岩手県管轄地誌」の物産に関するデータを地図上に落とししたものを基礎資料とする。これに、北上山地の山村の調査で得た生業の実態・特性や変遷に関する聞き取りデータや、市町村史などの地域ごとの文献資料を重ね合わせながら、明治前期における北上山地の野生動植物などの資源利用の実態と、それを変化させていった山村へのインパクトが何であったかについて明らかにしていく。

【キーワード】 資源利用・生業・林野利用

第IV部 現在の森林環境と人間

第14章 井上卓哉・池谷和信・岡恵介「人間活動からみた植物と人間とのかかわり」

山菜やキノコなどの食用植物は、現在の山村において、日常の食卓を彩る食材としてだけではなく、貴重な現金収入源としての価値をも有している。そして、安定した採集を可能にするために、集落の背後に広がる山地の多様な利用が見られる。そこで、本章では、信越国境の秋山地域、奥羽地域、北上地域などでの事例から、現在の山村における食用植物利用の状況および、それらの採集方法についてとりあげ、食用植物を介した山地利用について明らかにする。

【キーワード】 山菜・キノコ・採集方法

第15章 伊澤紘生 「サル之眼からみた動物と人間とのかかわり」

ニホンザルは、日本人にとってもっとも親しまれてきた動物である。しかし、近年では、農作物の害などからやっかいな動物としてみられ日本人による認識が変わってきている。本章では、筆者による長年にわたる現地調査の成果をふまえて、これまでの森林環境と人間との関わり方の変遷についてサルのまなざしから展望する。それと同時に、これからの動物と人間との望ましい関わり方についての提言を述べる。

【キーワード】 サル・獣害・狩猟

第16章 池谷和信 「現代山村における資源利用と獣害」

現代の山村においては、林野への依存度が減少するなど、自然資源利用は大きく変容してきた。その一方で、奥山に生息する動物であるといわれたニホンツキノワグマほか、近年において多くの動物が奥山から里山に生息地を移動させてきた。その結果、動物による農作物の被害や人身害が各地で生じている。この章では、北上山地の山村を対象にしてどうして動物は害を与えるようになったのか、人々はどのような対応をとっているのかについて現地調査の成果をもとに明らかにする。

【キーワード】 地域住民・資源利用・獣害

コラム1 西崎伸子 「北に進むイノシシとその害」

阿武隈山系の北部地域では、20年前ごろからイノシシによる農作物被害が顕著になってきた。これまでイノシシの被害への対処の経験がない地域住民は、さまざまな方法を試みながら自ら対処の方法を編み出している。しかし、他の中山間地域と同様に、少子高齢化が急速に進み、自らの力だけで対処していくことが難しくなっている状況がある。このコラムでは、阿武隈山系に位置するK村でおこなわれている住民がおこなうさまざまなイノシシ対策を事例にして、その可能性と限界および、他の行政など他のアクターとの「協働」の実態をあきらかにする。そして、野生動物の保護管理における「科学知」の集積が重視されるなかで、地域住民の視点（在来知）をとり入れることの意味を論じる。

【キーワード】 野生動物保護管理・科学知・在来知・中山間地域・協働

コラム2 吉村郊子 「信越国境秋山地域の生活と山」

山に囲まれたこの地域では、そこに生育する動植物資源がさまざまなかたちで利用されてきた。このコラムでは、木工品や樹木の蔓を用いたカゴなど日常生活に密着した（非食用の）加工品の材料入手、製作、自家利用や販売等の側面から、人びとの生活

と山のかかわりを記述する。

終章 山と森の「賢明な利用」と重層する環境ガバナンス

白水 智・池谷和信

中部・東北地域の森林や生物に関わる自然条件を背景としながら、そこに展開した近世以来の社会体制の下で、自然と人間との関わりがどのように変遷を遂げたか、また個人や村、領主、幕府などの相互関係がそこにどのように作用していたかについて考察を行う。その際、自然環境を改変することに対して、これを防ごうとする志向と推進しようとする志向とが政治的・経済的な動きと絡んでどのように展開・推移したかに注目して考察を進めたい。

【キーワード】 環境ガバナンス・政治体制・自然資源

全体会議で検討したい事項：

- ・出版までのタイムスケジュール
- ・第6巻の編集方針

〈誌上報告:東北班の活動について〉

1. 研究内容と進捗状況

1-1 研究の内容と方法

東北班では、東北地方のなかで北上山地およびその周辺地域を主な調査対象地にして、ここでの近世から近代にかけての自然資源利用、とりわけ動物資源に注目して、地域住民と動物とのかかわりを明らかにすることを目的とする。その際には、これまで各地域において動物資源の持続的利用が行われてきたのか、住民は獣害によりさまざまな被害を受けてきたのか否か、地域性と歴史性をふまえて人間と動物との相互関係が明らかにされる。

今年度は、①各メンバーの調査地での継続調査をさらに進めると同時に、②2008年11月1-3日にかけて、北上山地北部の岩泉町・久慈市での調査巡検（メンバー以外も含めて8名参加）を行った。まず、各メンバーは、クマ（池谷）、シカ（岡）、オオカミ（菊池）、サル（三戸、伊澤）、イノシシ（西崎）のように、対象とする主な動物ごとにおいて研究を分担してきた。また、対象地域においても、北上山地の北に位置する下北半島（三戸）、北上山地北部（菊池）、中部（岡）、南部（池谷）、北上の南の阿武隈山地（西崎）、奥羽山脈（伊澤）のように、お互いが地域を部分的に重複しながらも、主な地域において定点観測的な調査を継続している。

① たとえば池谷は、北上山地の南部に位置する遠野地方を中心として、その周辺の五葉地方などでの現地調査を継続しているが、2008年度は、クマよりもシカのほうが大きな問題をもたらしていることを明らかにしている。これは、山村住民の視点からみて、多様な動物資

源とのかかわり方の実態とその変化を見ることが重要であることを示唆する。岡は、北上山地の岩泉町安家地区でのこれまでの現地居住調査の結果を、過去 150 年間における資源利用の変遷という点からまとめあげた。これは、必ずしも動物資源を中心においたものではないが、北上山地の 1 つの自然資源利用の変遷を示すモデルとして大いに注目される。菊池は、北上山地北部の久慈市において、藩の牧の管理や獣害（オオカミ）の実態を古文書調査で明らかにするのみならず、さらに現地調査を加えることで、かつての牧の地形や植生などの自然的特性と現在のそれとの違い、および過去から現在までの土地利用の変化を詳細に把握しようとしている。三戸は、サルと人とのかかわりの歴史的変遷を人の側から丹念に調査することで、下北半島にとどまらず、東北地方全般にわたる厩ザルの分布ほか動物利用文化の中身の解明を精力的に進めている。伊澤はサル側からサルと人とのかかわりを定期的調査によって獣害の実態の把握のみならず、その対策（犬の利用）についても検討する。最後に西崎は、現在、東北地方を北上しているといわれるイノシシに注目して、阿武隈山地の住民とイノシシとの新たな関係を把握するための基礎調査を行った。

その一方で、②北上山地北部の岩泉町・久慈市での調査巡検では、メンバーが同じフィールドを共有することで、とりわけ山村での自然（動物・植物）と人々とのかかわり方についての議論を深めることができた。つまり、そのテーマを解明するためには、①生態学、②民俗学・民族学、③歴史学などの個々の分野を深めることが必要であると同時に、3つの方法を統合することが不可欠になってくることを各メンバーが強く自覚したということである。具体的に、その統合方法の中身についてはまだまだ検討される必要がある。これらの成果としては、各メンバーのこれからの研究において、共通の枠組みの存在を提供したことが挙げられる。なお、この巡検に参加してサンプルを収集した川瀬大樹による遺伝解析の結果、岩泉町安家地区のアサツキはシロウマアサツキの系統に、三陸海岸のアサツキは北海道の海岸に分布しているエゾネギに近いなど、アサツキの地理的分布についても興味深い結果が得られたことを付け加えておく。

1-2 プロジェクト終了までに期待できる成果

各メンバーは、プロジェクト終了までに学術雑誌などに論文として投稿すると同時に、東北班単独の成果を出すのか否かを班内で議論を進める必要がある。もともと、上述の研究目的のためにメンバーが集められ、研究内容の分担が決められているので、班全体としての総括が是非とも必要であろう。現時点では、上述のように、一見、対象動物や対象地域による違いが認められる研究成果をより総合的にまとめあげることから、より抽象度の高い人間・動物相互作用モデルの提示が期待される。とくに、野生動物の盛衰の時期やその要因は、地域によりまた参照する資料によって異なっていること、またその要因をめぐっては班のメンバー内でもその見解が大きく分かれている。今後、研究会などによって、さらなる議論を進めることで、東北班としての最終的な結論を導いていく予定である。

1-3 今年度の研究成果の発信

【刊行物】

池谷和信・林 良博編著『野生と環境 ヒトと動物の関係学 第4巻』岩波書店。2008年11月26日刊行。

池谷和信ほか「地球環境と野生動物」池谷和信・林 良博編著『野生と環境 ヒトと動物の関係学 第4巻』岩波書店。2008年11月26日刊行。

岡 恵介『視えざる森の暮らしー北上山地・村の民俗生態史ー』大河書房。2008年11月刊行。

菊池 勇夫『仙台藩と飢饉』(仙台・江戸学叢書16、大崎八幡宮発行、2008年12月20日発行予定)。
※ブックレット、70頁。

菊池 勇夫「馬と牛ー下北半島を中心にー」(連載菅江真澄から近世史をさぐる④)、『真澄学』4、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2008年12月刊行予定) 259~276頁。

【発表】

菊池 勇夫 講演「菅江真澄と天明の飢饉ー『楚堵賀浜風』を読むー」、安藤昌益と千住宿の関係を調べる会例会、2008年11月21日、千住仲町氷川神社社務所

菊池 勇夫 講演「獣害からみた環境史」(南部ふるさと塾、青森県南部町教育委員会社会教育課主催、2008年12月13日)。

2. 今後の活動

2-1 今後の取り組みと具体的な活動内容

プロジェクト期間内にさらにデータを収集し、東北班のメンバー全員が、プロジェクトの成果本として予定されている『山と森の環境史(第5巻)』(仮題)に寄稿することになっているので、今後、各論文やコラムの質を高めるために、よりよい内容にする努力が不可欠である。また、その際には、環境史年表や環境ガバナンスなどがキーとなる枠組みになっているので、各自がそれらを十分に考慮することも必要である。さらに次年度は、岩手県内において地元の人々を含めたシンポジウムを計画しており、班メンバーの成果を公表することで、その内容の現代的な意味などが試されることになるであろう。

2-2 研究遂行上の問題点と解決策

〈誌上報告:中部班の活動について〉

1. 研究内容と進捗状況

1-1 研究の内容と方法

中部班では、山地の生活に焦点を当て、そこで自然環境がどのように利用され、改変されてきたか、また資源利用に対して人間社会がどのようなルール・規制を構築してきたかを解明していきたいと考えている。それはひいては、山地資源の持続的、あるいは逆に断続的な利用に、人間社会がどう関わってきたかを解き明かすことにもなると考えるからである。

本2008年度も従来と同様、自然地理・生物学などの自然系からと人文地理・民俗・林学・文献史学の各分野から、信越国境秋山地域を共通フィールドとして研究を行った。昨年度からの変更点としては、新たに古生態班による秋山での花粉分析が行われたことが挙げられる。まだ結果については承知していないが、データ採取可能なポイントの中で集落に近い場所を選定して行っており、結果に興味を持たれる。

その他各分野における活動内容・成果は以下のとおりである。

〈自然地理〉中津川中流域に分布する地すべり地形・河成段丘の継続調査を実施

し、編年資料を集積した。その結果、大赤沢面が下流域の大割野 I 面 (1.5~2 万年前) に対比されること、大赤沢面形成後に本流の谷側積載*が生じたことが明らかとなった。また、旧焼き畑地の山林内において、年代測定用のサンプルを複数採取した。

〈生物学〉6月から10月まで赤外線センサーカメラをさまざまな林分に設置して哺乳類相とその分布を調査したところ、カモシカとノウサギ、ツキノワグマをはじめ、14種の哺乳類が撮影された。また、前年度から植物リスト調査を継続して標高650~2145mまでのさまざまな林分での調査を終えるとともに、集落近辺の森林において木材資源量の推定のために毎木調査を行った。

〈人文地理〉秋山郷和山地区の旧土地台帳に記載された明治大正期の地目・所有者のデータについて森林基本図をベースに地図化した。和山地区で部落有林野の利用実態に関する聞き取り調査を実施した。

〈民俗学〉山菜およびキノコ等の食用植物について、採集活動の同行調査を行い、秋山地区における植物資源利用の実態を知る為のデータを収集する事ができた。

〈林学〉多豪雪地帯に不適とされたカラマツが秋山地域で散見されたので、立地環境および成長状況を調査したところ、カラマツの植栽地は焼畑跡地の平坦面に集中していた。またカラマツ林は、成立本数が多くても林床が明るいため、カラマツの林床でタケノコや山菜等の栽培を行っている事例が認められた。

〈文献史学〉従来信濃側の秋山地域についてのみ史料調査を行ってきたが、今年度より越後側の秋山地域についても調査を開始し、結東や大赤沢の旧家に残されてきた史料を撮影することができた。また、信越巢鷹争論に関する越後側史料を、芦ヶ崎地区で撮影することができた。

1-2 プロジェクト終了までに期待できる成果

歴史学および民俗学の分野に関していえば、すでにこれまでに数年から二十年程度にわたる資史料の蓄積を経ており、本プロジェクト開始後も、従来に継続して新たな資史料・情報が多数見出されつつある。残りの調査研究期間で、現在に残る主要な研究素材は収集を終えることが概ね可能と思われ、標記の課題に迫る分析は行えるものと考えられる。

昨年度、秋山に関する近世の主要史料の半分程度について翻刻を行い、史料の利用が非常に楽になったが、今年度は残る半分について同様の成果を発表する予定である。生物学の分野では、これまでの植物に加えて動物の生息種や活動状況に関するデータをとりつつある。その他文献史料については、近世の信越巢鷹山争論に関して、従来の信濃側の主張ばかりでなく、越後側の主張を裏づける史料を新たに調査・撮影することができた。人間社会による自然利用規制の顕著な例といえる巢鷹山制度について、より具体的かつ精緻な理解が可能になると考えられる。自然地理学によって秋山の地形形成の特質が明らかになるとともに、人文地理学的見地からは近代以降の山地利用をめぐる行政面からのデータと聞き取りによる生活データとがリンクされつつある。また林学によるアプローチによって、森林のあり方における人為作用と生活利用的な要素が明らかになりつつある。

これらの成果を通して、前近代以来現代に至るまでの山地資源の利用方法および社会的規制が次第に明確になりつつある。残り期間の調査によって山地の「自然環境がどのように利用され、改変されてきたか、また資源利用に対して人間社会がどのようなルール・規制を構築してきたか」という中部班の課題に答えていくことができると考えている。

1-3 今年度の研究成果の発信

小山泰弘「長野県におけるニホンジカの盛衰」『信濃』60、2008年、p 559-578

岡田充弘・小山泰弘・遠山育・亀井利活・竹田謙一・山内仁人「長野県中部の山地におけるニホンジカの土地利用実態」、日本哺乳類学会、P107、2008年学会発表。

厳密には昨年度の成果に属するが、調査現地での報告会を中部班として実施した。昨年に続き2回目である。今年度もまた実施する予定である。なお、昨年度の第2回報告会の内容については、これを集成した報告集を作成し、私家版として発行した。

白水 智「山梨日日新聞」文化欄に「やまなし食の風土誌」連載第12回として「獣と人と」と題する文章を掲載した。直接地球研の調査研究に基づくものではないが、近世中部地方の動物と人間との関係として、本プロジェクトとも関連性のあるテーマなので、掲げておく。(2008年9月4日)

白水 智「いま山村の歴史と生活文化から何を学ぶか」(『増刊 現代農業』11月号)。

「集落支援ハンドブック」と題する特集号で、その中に標記のタイトルでのインタビュー記事が掲載された(158~165頁)。

白水 智「山に人が住むということ」(『月刊 自治研』11月号)。秋山の例などをデータをあげて紹介した。上記の『現代農業』のインタビューと内容的には重なる部分が多い。

2. 今後の活動

2-1 今後の取り組みと具体的な活動内容

プロジェクト期間内に、各分野においてさらに継続してデータを収集し、分析を行うとともに、第三回の現地報告会を通して調査地に対する成果還元を図る。なお、成果本の編集に向けて、東北班との合同編集会議を開く必要があると考えている。

2-2 研究遂行上の問題点と解決策

第 6 卷 『人と自然の環境史』

編集責任: 湯本 貴和 (地球研), 矢原 徹一 (九州大学), 松田 裕之 (横浜国立大学)

巻の趣旨: 日本列島においては、人間活動の自然への徹底した関与にもかかわらず、これまで植物や淡水魚の固有種を数多く含む豊かな生物相が維持されてきた。このことから、近代以前の日本における人間－自然相互関係には生物資源を枯渇させないような伝統的な知恵があり、むしろ適度な人間活動こそが日本の持続可能な生物資源と豊かな生物相を支えてきたという見解が一般に受け入れられている。この巻では、環境史年表で日本列島における「賢明な利用」を描き出し、その帰結を検証することによって、将来に向けて生物文化多様性を発展的に継承するための方策を論じる。

目次:	(タイトル)	(執筆者)
序章	日本列島の環境史年表	湯本貴和・矢原徹一・松田裕之
第Ⅰ部	生物文化多様性の意味	
第1章	生物文化多様性はなぜ大切か?	今村彰生
第2章	先住民の智慧と生物文化多様性	矢原徹一
コラム1	『賢明な利用』の形成と崩壊－ワサビを例に	山根京子
コラム2	妖怪の生物文化多様性	湯本貴和
第Ⅱ部	「賢明な利用」とは何か	
第3章	生態学からみた「賢明な利用」	松田裕之
第4章	「賢明な利用」と環境倫理(仮題)	安部 浩
コラム3	アイヌの資源利用の実態	児島恭子
第Ⅲ部	重層した環境ガバナンス	
第5章	前近代の日本列島における資源利用をめぐる社会的葛藤	白水 智
第6章	日本におけるコモンズと重層する環境ガバナンス	森元(原田)早苗
第7章	環境ガバナンスからみた成功と失敗の歴史	安溪遊地
第Ⅳ部	未来可能性にむけて	
第8章	日本列島における「賢明な利用」と重層する環境ガバナンスのまとめ	湯本貴和・矢原徹一
第9章	生物多様性の発展的継承にむけて	湯本貴和

〈各章のキーワードと概要〉

湯本貴和 「生物文化多様性とは何か」

身の回りの自然から生態系サービスを楽しむためには、動植物を含めた自然の知識と、それを持続的に利用する装置である「文化」が必要である。「文化」を人間が環境に対する適応であると考え、文化の多様性は地域のさまざまな自然にカスタマイズした結果として位置づけられる。地域の文化を発展的に継承するのは単なるノスタルジーであってはならない。環境負荷を抑えながらも「豊かな」生活を実現する現実的な道具箱として活用すべきである。

【キーワード】 文化の価値 環境負荷 生物資源

コラム1 山根京子 『賢明な利用』の形成と崩壊－ワサビを例に』

高齢化、跡取り不足による耕作放棄、栽培技術や品種維持にかかわる伝統的知的財産の断絶、さらに開発、乱獲、獣害による自生地の減少など、ワサビをとりまく現状は厳しい。日本人が古来より、「とりつくすことなく」利用してきた植物資源としてのワサビを例に、自然と人間の共生史を復元し、賢明な利用を考える。

【キーワード】 ワサビ、保全、遺伝資源

コラム2 湯本貴和 「妖怪の生物文化多様性」

人間が短期的な利害を超えて、自然環境に配慮ある行動をとる原理のひとつに「自然への畏怖」がある。罰（バチ）が当たるということを、現実の因果としてリアルに恐れていた時代はそんなに昔のことではない。そのような罰を与える怪異現象は、しばしば妖怪として具現化されている。その妖怪の多様性を比較することで、環境保全の世界観をさぐることは可能であろうか。

【キーワード】 罰(バチ)、自然への畏怖、環境配慮

コラム3 児島恭子 「アイヌの自然利用の実態」

アイヌ文化の世界観から自然との関わりについて述べ、生活レベルではそれに反する行為があっても並存するのだという「実像」について、歴史的に変化するという視点を含めて論じる。

【キーワード】

第6章 森元(原田)早苗 「日本におけるコモンズと重層する環境ガバナンス」

賢明な利用として、「コモンズ」という自然資源の共同利用、管理のあり方に着目する。近代以前だけではなく、近現代のコモンズも取り上げ、いくつかの事例からコモンズを利用、管理する多様な主体の意識を探り、また、時代に対応したコモンズにおける制度の柔軟性を

検討する。その上で、自然資源管理としての役割、コモンズの公的および私的資源管理と比較した位置づけ、および地域社会における社会的役割を提示する。

【キーワード】 コモンズ、環境ガバナンス、意識

第8章 湯本貴和・矢原徹一「日本列島における「賢明な利用」と重層する環境ガバナンスのまとめ」

生物資源を枯渇させず、生態系サービスを持続可能なかたちで利用するためには、自然に対する深い知識だけでは十分ではない。適切な環境ガバナンスがないと、自然に関する優れた知識は生物資源や生態系を短期的な利益のために徹底的に破壊しつくことも可能である。日本列島において、重層する環境ガバナンスがどのように機能して、持続可能な社会をつくりえるのかを歴史的な成功例と失敗例を検討し、どのような条件で適切な「賢明な利用」が実現するかを概念的にまとめる。

【キーワード】 「賢明な利用」、適正な環境ガバナンス、概念化

第9章 湯本貴和「生物多様性の発展的継承にむけて」

「自然を守る」ことは、結局のところ、なぜ必要なのか。そのためにどういう方策が可能なのか。このプロジェクトで明らかになったこと、このプロジェクトの成果をふまえて提言できることを、力強く述べる。

【キーワード】 政策提言、新しい環境ガバナンス、新しいコモンズ

全体会議 参加者名簿

	氏名	班名*	所属		氏名	班名*	所属
1	○ 安部 浩	保全	京都大学大学院人間・環境学研究所	38	高橋 敬子		総合地球環境学研究所
2	荒垣 恒明	中部	東京工業高等専門学校	39	○ 高原 光	古生態	京都府立大学大学院生命環境科学研究科
3	安溪 貴子	奄美・沖縄	山口大学医学部	40	○ 田島 佳也	北海道	神奈川大学経済学部歴史民俗史料科学研究科
4	○ 安溪 遊地	奄美・沖縄	山口県立大学国際文化学部	41	田中 洋之	マルハナバチ	京都大学霊長類研究所
5	○ 飯沼 賢司	九州	別府大学文学部	42	玉川 剛司	九州	別府大学文学部
6	五十嵐 八枝子	古生態・サハリン	北方圏古環境研究室	43	丹野 研一	9研(佐藤プロ)	総合地球環境学研究所
7	○ 池谷 和信	東北	国立民族学博物館	44	辻野 亮	植物地理・中部	総合地球環境学研究所
8	石丸 恵利子	古人骨	総合地球環境学研究所	45	寺島 宏貴	中部	東京大学大学院
9	出穂 雅実	サハリン	札幌市埋蔵文化財センター	46	渡久地 健	奄美・沖縄	琉球大学法文学部
10	伊東 宏樹	近畿	森林総合研究所多摩森林科学園	47	○ 中井 精一	方言	富山大学人文学部
11	井上 卓哉	中部	富士市立博物館	48	中澤 克昭	中部	長野工業高等専門学校
12	○ 今村 彰生	保全	京都学園大学バイオ環境学部	49	中野 泰	北海道	筑波大学大学院人文社会科学研究所
13	上野 淳也	九州	別府大学附属博物館	50	永松 敦	九州	宮崎公立大学人文学部国際文化学科
14	丑丸 敦史	マルハナバチ	神戸大学発達科学部	51	西崎 伸子	東北	福島大学行政政策学類
15	蛸原 一平	奄美・沖縄	国立民族学博物館	52	長谷 義隆	古生態・九州	天草市立御所浦白亜紀資料館
16	大井 信夫	古生態	ONP研究所	53	長谷川 裕彦	中部	明治大学文学部
17	○ 大住 克博	近畿	森林総合研究所関西支所	54	早石 周平	奄美・沖縄	琉球大学大学院教育センター
18	小椋 純一	古生態	京都精華大学人文学部	55	深町 加津枝	近畿	京都府立大学大学院生命環境科学研究科
19	小田 寛貴	サハリン	名古屋大学年代測定総合研究センター	56	藤井 紀行	植物地理	熊本大学大学院自然科学研究科
20	叶内 敦子	古生態	明治大学文学部	57	細井 まゆみ		総合地球環境学研究所
21	川瀬 大樹	植物地理・東北	総合地球環境学研究所	58	堀内 美緒	近畿	京都大学大学院農学研究科
22	河野 樹一郎	古生態・九州	京都府立大学大学院生命環境科学研究科	59	松井 淳	保全	奈良教育大学
23	紀藤 典夫	古生態	北海道教育大学教育学部函館校	60	松田 裕之	保全	横浜国立大学大学院環境情報研究院
24	日下 宗一郎	古人骨	京都大学大学院理学研究科	61	三浦 泰之	北海道	北海道開拓記念館
25	児島 恭子	北海道	昭和女子大学人間文化学部	62	三戸 幸久	東北	愛知教育大学
26	小杉 康	北海道	北海道大学文学研究科	63	南木 睦彦	古生態	流通科学大学商学部流通学科
27	小山 泰弘	中部	長野県林業総合センター	64	宮緑 育夫	九州	森林総合研究所九州支所
28	佐久間 大輔	近畿	大阪市立自然史博物館	65	三輪 大介	奄美・沖縄	兵庫県立大学
29	佐々木 章	九州	別府大学文学部	66	○ 村上 哲明	植物地理	首都大学東京大学院理工学研究科
30	佐々木 尚子	古生態・九州	総合地球環境学研究所	67	村上 由美子	近畿	総合地球環境学研究所
31	○ 佐藤 宏之	サハリン	東京大学大学院人文社会系研究科	68	盛口 満	奄美・沖縄	沖縄大学人文学部こども文化学科
32	清水 勇	保全	甲南大学理工学部	69	森本 仙介	近畿	神奈川大学常民文化研究所
33	○ 白水 智	中部	中央学院大学法学部	70	○ 矢原 徹一	保全	九州大学大学院理学研究院
34	須賀 文	マルハナバチ	長野県環境保全研究所自然環境部	71	○ 山口 裕文	栽培植物	大阪府立大学大学院生命環境科学研究科
35	瀬尾 明弘	植物地理・奄美・沖i	総合地球環境学研究所	72	山根 京子	栽培植物	大阪府立大学大学院生命環境科学研究科
36	早田 勉	サハリン	(株)火山灰考古学研究所	73	◎ 湯本 貴和		総合地球環境学研究所
37	高橋 啓一	サハリン	滋賀県立琵琶湖博物館				

◎:リーダー
○:コアメンバー

*オブザーバーとしての参加も含む